

田遊びと修正会が出会う場（下）

—近畿・東海地方の田遊びの中での高野山周辺地域の修正会と御田—

脊 古 真 哉

（承前）

前々稿「田遊びと修正会が出会う場（上）—高野山周辺地域の修正会系行事の成立と分布についての予備的考察—」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』37 2018年）、前稿「田遊びと修正会が出会う場（中）—天野社と高野山周辺地域の修正会と御田—」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』39 2020年）を承けて、ひろく近畿・東海地方の田遊びの中での高野山周辺地域の御田と修正会について考察する。

まず、他の地域の田遊びと比較して共通する内容を取り上げる。一般的に田遊びに共通する内容ではなく、この地域の御田の成立と展開を考えるために重要な手がかりと見られる要素を取り上げる。具体的には、御田の主な演者の呼称である舅の「穂長の尉」と婿の「福太郎」の拡がり、そして前近代の天野社の修正会に見られた鬼の登場の2点を取り上げる。続いて高野山周辺地域の御田には見られない要素にも注目し、近畿・東海地方を中心に見られる田遊びに登場する子供の人形と、東海地方の顕密寺院および仏堂等の田遊びの前に実施される結界儀礼である方固めについて取り上げる。

他にも近畿地方と東海地方の御田・田遊びには異なる点は少なくない。田遊びのなかでの牛耕と馬耕の差異、模造鍬などの用具に餅で作られたものを用いるが否か、などである。さらに高野山周辺地域から遠くない奈良盆地に修正会に付随する御田がほとんど見られず、大部分の御田は神社行事として実施され、ほぼ同じ内容のものであることにも着目したい。

このような視点から、近畿・東海地方の修正会に付随する田遊びの中に、高野山周辺地域の御田と修正会を位置付けたい。

12 穂長の尉と福太郎

各地の田遊びには、苗取りや田植えに登場する早乙女役は別として、主たる演者2人で実施されるものと多くの演者が役割を分担して個々の演目を演じるものがある。多くの田遊びの事例が伝承されてきた東海地方では、地方顕密寺院や諸国一宮など比較的大きな宗教施

設での行事には演者2人のタイプが多く、集落の仏堂などの宗教施設での行事には役割分担のタイプが多く見受けられる。

東海地方の地方顕密寺社の主な演者2人のタイプの田遊びとしては、白山神社・長滝寺（岐阜県郡上市、天台宗）の六日祭の例、滝山寺（愛知県岡崎市、天台宗）の鬼祭の例、法多山尊永寺（静岡県袋井市、高野山真言宗）の田遊祭の例、三嶋大社（静岡県三島市）の田祭の例などがある。これらの事例については以下の叙述で適宜取り上げる。

前稿で述べたように天野社（丹生都比売神社、和歌山県伊都郡かつらぎ町）をはじめとして和歌山県の高野山周辺地域の御田の場合は主な演者2人およびその変形と見られるものとなっている。天野社と真国宮（海草郡紀美野町）の2人は着面で、他の事例ではいずれも主な演者は素面となっている。天野社では白尉面を着けるのを「田人」、黒尉面を着けるのを「牛飼」としている。真国宮では土俗的な面を着けた舅と婿を「花賀の丞」と「福太郎」と称している。この「花賀の丞」は後述する他の地域の事例から見て「穂長の尉」の転訛と判断できる。天野社の「田人」「牛飼」の呼称は明治期の詞章本によるものであり、周辺の他の事例から見て、あたらしく変化したものである可能性があるろう。

有田川流域の旧花園村（現伊都郡かつらぎ町）・旧清水町（現有田郡有田川町）に位置する例では以下のようにになっている。梁瀬（かつらぎ町）では舅を「黒シラゲ」もしくは「百々の丈」、婿を「福太郎」と称し、2人の演者の掛け合いで進行されるが、田打ちなどは「脇鋏」「尻鋏」と呼ばれる「百太郎」「徳太郎」の2名が「福太郎」とともに演じる。前稿で田主もしくは神主役の「白シラゲ」と舅の「黒シラゲ」は白尉と黒尉の面を着けていたのではないかと想定した。杉野原（有田川町）と久野原（有田川町）では素面の舅と婿の2人の演者の掛け合いで演じられ、杉野原では舅を「重之衆」、久野原では舅を「中の丞」、婿を「福太郎」としている。

廃絶例の押手（有田川町）では「白シラゲ」と「黒シラゲ」（おものじよ）と「福太郎」が登場し、他に「百田の主」「徳田の主」が見え、梁瀬ときわめて似通った人員の構成であったようである。同じく廃絶例の北寺（かつらぎ町）では舅を「おもの丈」、婿を「福太郎」とし、別鋏の「百太郎」「徳太郎」が登場した。また、有田川流域よりもう1つ南の日高川流域の和歌山県日高郡日高川町（旧美山村）串本の御田でも台本によれば「太茂之丞」と「福太郎」が見え、この他に「福牧」「若牧」「音牧」が登場した⁽¹⁾。

これら高野山周辺地域の御田に登場する「穂長の尉」と「福太郎」に類似する呼称は、ひろく現在の各地の行事、廃絶事例の次第書などにも見受けられる。管見に触れた事例を表8に示しておこう。

表8を通覧すると、現行のものでは西は兵庫県加西市、東は静岡県三島市と近畿・東海地方にひろく伝承されており、さらに関連すると見られる例は、西は岡山県苫田郡、東は東京都内にまで広がっている。後述する油日神社の福太夫面の銘などから見ても、これらの源流

田遊びと修正会が出会う場（下）

表8 各地の田遊びの穂長の尉と福太郎の類例

	宗教施設	所在地	穂長の尉	福太郎	その他	備考
1	諏訪神社	東京都板橋区	(大稲本・小稲本)	太郎次	作太郎・作次郎	
2	北野神社	東京都板橋区	(大稲本・小稲本)	太郎次	百太郎・百次郎	
3	氷川神社	東京都練馬区	主人(まんがのじょう)	作太	百太郎・百次郎	廃絶
4	鶴見神社	横浜市鶴見区	ほなかのちやう		尺太郎・尺次郎	明治初年廃絶 1987年復興
5	三嶋大社	静岡県三島市	穂長の尉(舅)	福太郎(婿)	田主	
6	日向観音堂	静岡市葵区		福太郎	徳太郎	
7	八坂神社	静岡県藤枝市	親父(じい尉)	太郎	次郎	
8	大井八幡宮	静岡県焼津市			徳大夫	
9	蛭児神社	静岡県牧之原市	親方		徳長(3名)	
10	小国神社	静岡県森町			徳太郎	
11	神沢阿弥陀堂	浜松市天竜区	親父	あに		田遊びの部分は廃絶
12	鳳来寺	愛知県新城市		福太郎		現行次第では登場せず
13	滝山寺	愛知県岡崎市	コツボネ(親or兄)	福太郎(子or弟)		
14	手力雄神社	岐阜県各務原市		福太郎		廃絶
15	長滝白山神社	岐阜県郡上市	親	ボチ		
16	北方神社	岐阜県揖斐川町		福太郎		2011年復興
17	油日神社	滋賀県甲賀市	はなのじやう	福太夫(福太郎)		廃絶
18	岡田国神社	京都府木津川市	なかの志やう	福太郎		廃絶
19	相楽神社	京都府木津川市	ほうなかの志よ			
20	水分神社	奈良県宇陀市		福太郎	徳太郎	
21	穴師坐兵主神社	奈良県桜井市		福太郎		廃絶
22	丹生都比売神社	和歌山県かつらぎ町	田人	牛飼		
23	真国丹生神社	和歌山県紀美野町	花賀の丞	福太郎		
24	中南地藏堂	和歌山県かつらぎ町	おものおちやう	婿	徳太郎(田主)	廃絶
25	北寺観音堂	和歌山県かつらぎ町	おものお丈(舅)・白シラゲ	福太郎(婿)	百太郎・徳太郎	廃絶
26	梁瀬大日堂	和歌山県かつらぎ町	百々の丈(黒シラゲ)・白シラゲ	福太郎	百太郎・徳太郎	
27	押手大日堂	和歌山県有田川町	おものおじよ(黒シラゲ)・白シラゲ	福太郎	百田の主・徳田の主	廃絶
28	杉野原薬師堂	和歌山県有田川町	重之衆(舅)	婿	田刈り	2018年廃絶
29	久野原岩倉神社	和歌山県有田川町	中の丞(舅)	福太郎(婿)		2019年廃絶
30	河内明神社	和歌山県有田川町	大茂之丞	福太郎	福牧・若牧・音牧	廃絶
31	杭全神社	大阪市平野区	穂長の尉	太郎坊	次郎坊(人形)	
32	多治神社	京都府南丹市			作太郎・作次郎	
33	東光寺	兵庫県加西市	田主	福太郎	福次郎	
34	布施神社	岡山県鏡野町	殿	福太郎		

*ゴシックは着面であることが確認できる者

は中世に遡るものとする事ができる。各地の例から見て2名の演者を「穂長の尉」と「福太郎」とするのが基本形であったと思われる。「穂長の尉」は稲穂の順調に登熟することを期待しての呼称であり、「福太郎」は吉祥語の「福」にもとづく呼称であろう。

最初に中世後期や近世前期に遡る史料に記される例を見ておこう。滋賀県甲賀市の油日神社に伝わるかつて同社の「稲講会」に用いられたとされる福太夫面には「奉寄進油日大明神田作福太夫神之面／永正五年<戊辰>六月十八日／櫻宮聖出雲作(花押)」との永正5(1508)年の墨書銘がある⁽²⁾。この「福太夫」も上記の高野山周辺地域をはじめ各地の「福太郎」の類例に通じるものである。

宝暦4(1754)年の年紀のある短冊型の13枚の木札を束ねたものの表裏に記される「稲講会」の次第には「福太夫」が見え⁽³⁾、安永8(1779)年の年紀をもつ次第書には「はなのじやう」と「福太夫」が見え、詞章では「福太夫」は「福太郎」となっている⁽⁴⁾。同社には福太夫面よりは少し時代が降りそうであるが翁(白尉)面も伝わっており、これが後述する「ずずい子」や「福太夫」を呼び出す田主役(はなのじやう)が着けたものであったことも想定できる。

戦国期の永正5年の段階で田夫を務める「福太夫」の面に「田作福太夫神之面」とあることは、一連の類似する事例の各地に伝播するようになった時期を考えるためにきわめて貴重な史料となる。また「福太夫神」とあって「福太夫」を神と位置づけていることにも注目しておきたい。

岐阜県各務原市の手力雄神社に所蔵される天正11(1583)年の年紀をもつ「於富社_三二月朔日ノ夜田遊の次第」との史料には主たる演者として「福太郎」が見える。末尾に記される「于時天正十一(癸未)年六月十四日」の年紀は、史料全体の用字や筆跡から見て、そのままに受け取ることにはできないが、17世紀のうちには記されたものと判断できようか⁽⁵⁾。

さらに岐阜県揖斐郡揖斐川町の北方神社には、寛永12(1635)年の年紀をもつ『濃州大野郡北方村春日大明神御祭礼』が所蔵されており、ここには田遊びの主な演者(わき)として「福太郎」が見える⁽⁶⁾。この事例は明治初年に廃絶したが、2011年に「復興」され、現在では毎年4月に実施されている。これらの事例から見て、遅くとも近世前期までに近畿・東海のひろい範囲に田遊びの主な演者としての「穂長の尉」と「福太郎」の呼称は伝播していたことが窺える。

大阪市平野区の杭全神社の御田植神事では白尉面を着けた「穂長の尉」が登場し、1人で田打ちをはじめとする主な所作を演じる。田植えの場面に2名の早乙女役(少女)とともに呼び出される素面の作男の男性を「太郎坊」、「太郎坊」が背負う子供の人形を「次郎坊」と称している⁽⁷⁾。他に演目の中では用いられない黒尉面が所蔵されており、かつては田遊びの際にこの面を用いて翁舞が舞われたとの伝承がある⁽⁸⁾。

三嶋大社の田祭では舅である白尉面を着けた「穂長の尉」と婿である黒尉面を着けた「福

太郎」が登場する⁽⁹⁾。この事例の白尉面を着ける「穂長の尉」と黒尉面を着ける「福太郎」というのは各地の例から見てもっとも基本的なあり方ではなかろうか。なお、かつて用いられていた白尉面の古面には江戸時代初期の寛永元(1624)年の近江国の住人によって作られたという墨書銘がある⁽¹⁰⁾。京都府木津川市の相楽神社の御田祭の寛政12(1800)年の奥書をもつ『八幡宮御田次第／相楽村』との次第書には冒頭に「ほうながの志よ」が見える⁽¹¹⁾。

兵庫県加西市の東光寺（天台宗）の鬼会の田遊びでは、本堂内陣に座る田主役の住職は右手に軍配を持ち、左手には土俗的な面を持って顔に当てる。外陣に出て模擬耕作を行う作男の「福太郎」と「福次郎」も土俗的な面を着ける⁽¹²⁾。滝山寺の鬼祭の田遊びでは素面の「コッポネ」（こつほめ）と「福太郎」を主な演者として模擬耕作がおこなわれる⁽¹³⁾。天明2（1782）年の年紀をもつ『三州瀧山寺人日法会記』では「こつほめ」を親もしくは兄、「福太郎」を子もしくは弟とする⁽¹⁴⁾。

岡山県苫田郡鏡野町（旧富村）富西谷の布施神社のお田植祭では、模擬耕作の終了後に「殿」と「福太郎」の2名が登場する。羽織袴に烏帽子を被り両刀を帯し杖をついた「殿」が「福太郎」に朱傘を差しかけられて登場し「上千町は坪に早稲、中千町は坪に中稲、下千町は坪に晩稲」「一丈二尺の殻でき八寸の刈株、一尺二寸の稲穂、一寸二分の粃、八分の米、あと水口頼む福太郎」と荘重に唱える。その後「福太郎」と「殿」の寸劇風の滑稽なやり取りがある⁽¹⁵⁾。

奈良県宇陀市大宇陀平尾の水分^{すいぶん}神社の御田では福太郎などは登場しないが、「掛初め」（牛耕）の場面で「田主」が「福太郎も徳太郎も牛ヲ引き出せ、かけぞめをするぞ」との詞章を唱える⁽¹⁶⁾。この例では「若宮サン」と呼ばれる子供の人形に黒尉面が着けられている。静岡市葵区日向の観音堂の田遊び（七草祭）の詞章に「トクタロ」（徳太郎）と「フクタロ」（福太郎）が見え、田遊びの場に持ち出される箱に納められた秘面があり、これは翁面であるという⁽¹⁷⁾。

他に京都府南丹市日吉町の多治神社の御田では作男として「作太郎」「作次郎」の2名が中心的な役割を担う⁽¹⁸⁾。静岡県藤枝市滝沢の八坂神社の田遊びでは「山田打」の場面で「親父」「太郎」「次郎」の3名が田打ちを行う⁽¹⁹⁾。これらも「穂長の尉」と「福太郎」に関連するものと見られる。なお、長滝白山神社の六日祭（花奪い祭）の田遊びで田打ちの際に「親」に呼び出される「ポチ」も同様の由来をもつものであろう⁽²⁰⁾。

廃絶例では、奈良県桜井市の穴師坐兵主神社の『大明神御田之記』にも御田の詞章の格段に「福太郎」が見える⁽²¹⁾。京都府木津川市の岡田国神社の天明5（1785）年の詞章本にも「福太郎」が見える⁽²²⁾。現横浜市鶴見区の鶴見神社（旧称杉山神社）で正月16日に「うたひをどる明神の田祭うた」が実施されていたことが『新編武蔵国風土記稿』に記され⁽²³⁾、黒川春村（1799～1866年）が天保15（1844）年に『杉村神社神寿歌考註』に詞章を記録しており、これには冒頭に「ほなかのちやう」、稲刈りの場面には「尺太郎」と「尺次郎」が見える⁽²⁴⁾。なお、

この事例は1987年に100年以上の年月を経て「復興」され、現在では4月29日に実施されている。

このように同様の例は、現行のものでは西は岡山県苫田郡・兵庫県加西市、東は静岡県三島市と近畿・東海地方にひろく伝承されており、さらに関連すると見られる例は東京都内にまで広がっている。油日神社の福太夫面の銘などから見ても、これらの源流は中世に遡るものとする事ができる。ここまで提示してきたように各地の例から見て舅を「穂長の尉」とし、婿を「福太郎」とするのが基本形であったと思われる。

各地の例を通覧すると伝播・定着の過程で、「穂長の尉」は田主（領主）と舅もしくは親の2つの性格に分離する場合があります、別々の役となることがあった。高野山周辺地域の梁瀬の神主役の「白シラゲ」と舅役の「黒シラゲ」（百々の丈）はこの例となるものである。婿の「福太郎」は「徳太郎」「百太郎」「福次郎」などの分身を生み出し、田打ちなどを「福太郎」を含む複数人で演じる形態が成立した。高野山周辺地域の事例もこのような変化の状況を示している。

また、翁面などの猿楽面が使用される例が少ないので、このような形態の成立・伝播に猿楽の者の関与があったことが想定できるかもしれない。杭全神社と日向観音堂の事例では現行の次第には用いられない翁面が存在した。

高野山周辺地域の事例は、これらひろく近畿・東海地方に分布する「穂長の尉」と「福太郎」に類似する事例の中に位置付けられるものである。このような田遊び・御田の主たる演者としての「穂長の尉」と「福太郎」の分布、それに類似する事例の分布を通覧すれば、「近畿・東海型田遊び」という枠組みが設定できるのではないか。

13 鬼の登場

前稿で述べたように戦国期から近世の天野社の修正会には鬼が登場したことが確認できた。これは平安時代から中央の寺院の修正会で見られたことであり、京都や奈良の大寺院をはじめ、現在の各地の修正会でも多くの鬼の登場する事例が知られている。しかし、鬼の登場する修正会に田遊びが付随することは、歴史的な中央の修正会には見られず、現在の各地の事例でも限られた地域にのみ伝承されているものである。前々稿で述べたように東海地方以外では兵庫県播磨地域に3例（現行1例、廃絶2例）、そして高野山周辺地域の事例ということになる。

歴史的な中央の修正会に登場する鬼は毘沙門天・龍天によって法会の場から追い払われるものであった。愛知県豊橋市の安久美神戸神明社の鬼祭では、鼻高面を着け甲冑に身を固めて長刀を持った天狗と赤鬼が相対する「天狗のからかい」という場面がある⁽²⁵⁾。これは毘沙門天に追い払われる鬼のあり方の名残であろう⁽²⁶⁾。

東海地方の鬼の登場する地方顕密寺院の現行の修正会としては、前述の滝山寺の鬼祭、智満寺（静岡県島田市、天台宗）の鬼払いがよく知られている。滝山寺の鬼祭は田遊びが付随するものであるが⁽²⁷⁾、滝山寺の鬼祭が影響を与えたと想定できる事例は周辺に見られない。また、智満寺の鬼払いには田遊びの要素は見られない⁽²⁸⁾。長滝寺・白山神社の六日祭では「乱拍子」の「露払い」に鬼面（般若面）を着けた者が登場するが、これは修正会に登場する鬼とは性格の異なるものである⁽²⁹⁾。

このような状況で注目すべき事例としては鳳来寺（愛知県新城市、真言宗系単立）の修正会がある。現在の鳳来寺田楽は、1月3日の昼間に本堂前の田楽堂で実施されるが、慶安元（1648）年の年紀をもつ『鳳来寺興記』に拠れば前近代には正月3日・14日の2日間にわたって、鎮守社・本堂（薬師堂）・本堂前庭・常行堂（阿弥陀堂）で実施されていたという。『鳳来寺興記』に記されている「五人大烏帽子謡万歳楽、獅子舞・田楽舞等有之」「流鏝馬弓納等」といった儀礼・芸能のあり方は、現状や近世の次第書などから窺える状況と凡そ一致する。現行の鳳来寺田楽には鬼の登場は見られないが、『鳳来寺興記』の末尾にちかく、修正会の結願の後、3鬼が登場し人びとともに「踊躍歓喜」し、これを「鬼踊」と称したことが記されている⁽³⁰⁾。

現在の愛知・長野・静岡の県境地域である三河・信濃・遠江国境地域には集落の宗教施設の修正会系行事に田遊びと鬼の登場が見られるものがある。これら三河・信濃・遠江国境地域の仏堂・神社の新春行事に登場する鬼は、鳳来寺の修正会に登場した鬼を源流とするものであると判断している。管見に触れた三河・信濃・遠江国境地域の修正会系行事の事例を現行のもの、史料のもしくは伝承的に実施が知られるものを表9に掲げておく。表のAからEは地理的なまとまり、および行事の内容による分類である。

この中で鬼の登場するものとしては、6の黒倉、10の西菌目、12の新野、14の寺野、21の神沢、22の懐山、25の西浦が知られているが、後述するように黒倉と西菌目の2例は霜月の神楽である花祭の鬼が取り入れられたものである。他にも廃絶したものはあろうし、伝承の過程で鬼の登場が欠落したものがあつたことも想定できるが、鬼面の伝来の状況などから見て、元来的に鬼が登場する次第のなかったものも少なくないと判断している。

新野の雪祭では登場した3鬼はネギとの問答に敗れ、すごすごと退出するし⁽³¹⁾、浜松市天竜区（旧磐田郡）水窪町西浦の田楽でも近年は誤って「しずめ」と称されている鬼が咎め役の「毘沙門天の出でさせ給う所に汝は来まいものぞ、何しに来た、烏の頭が白くなるとも枯木に花が咲くとも汝は来まいものぞ、それならば一ちくとつてもとの本郷へ帰れ」との叱責によって追い払われる⁽³²⁾。これらの鬼は伝統的な修正会の追放される鬼の性格を受け継ぐものである。

なお、この地域の行事では愛知県北設楽郡東栄町・豊根村・旧津具村（現設楽町）に傳承されている花祭、および隣接する静岡県旧磐田郡佐久間町（現浜松市天竜区）の花の舞い、

表9 三河・信濃・遠江国境地域の修正会系行事

分類	集落名	現行/廃絶	所在地	祭 場		主な行事名	期 日		備考
				現 在	旧 祭 場		現	旧	
A	1 鳳来寺	現行	新城市門谷	田楽堂	本堂・鎮守社	田 楽	1月3日	正月3日・14日	鳳来寺田楽衆の東郷・西郷
	2 寺 林	1943年廃絶	新城市富栄	—	大日堂	田 楽	—	正月1日・午日	鳳来寺田楽衆の東郷
	3 海 老	近世末廃絶	新城市海老	—	津島神社他	田 楽	—	正月7日・8日・9日	
	4 大代・古宿・大林	戦後廃絶	新城市四谷	—	大日堂	田 楽	—	正月6日・7日	大代・古宿・大林は近世前期に分村
B	5 田 峯	現行	北設楽郡設楽町	観音堂他	異同無	田 楽	2月11日	正月17日	高勝寺
	6 黒 倉	現行	北設楽郡設楽町	黒倉神社	(観音堂)	田 楽	2月第3日曜日	正月8日	舞処の厨子に観音・不動・毘沙門を安置
	7 古 戸	1873年廃絶	北設楽郡東栄町	—	(観音堂)	田 楽	—	正月14・15日	
	8 奈 根	明治初年廃絶	北設楽郡東栄町	—	不 明	ヒヨドリ	—	不 明	詳細不明
C	9 足 込	1871年廃絶	北設楽郡東栄町	—	熊野神社他	不 明	—	正月1日・2日	詳細不明
	10 西蘭目	休止中	北設楽郡東栄町	八幡神社	観音堂	田 楽	4月第4土曜日	正月8日	
	11 曾 川	明治初年廃絶	北設楽郡豊根村	—	薬師堂	田楽・十七・ヒヨドリ	—	正月8日	詳細不明
	12 新 野	現行	下伊那郡阿南町	伊豆神社 諏訪神社	(観音堂)	正月神事 (雪祭)	1月第3土・日曜日	正月14日・15日	仁善寺
D	13 黒 沢	現行	新城市七郷一色	阿弥陀堂	異同無	田 楽	2月第1日曜日	正月6日	六日堂 峯福寺
	14 寺 野	現行	浜松市北区	観音堂	異同無	ヒヨンドリ	1月3日	正月3日	三日堂 宝蔵寺

田遊びと修正会が出会う場（下）

15	渋川	廃絶	浜松市北区	——	薬師堂	不明	——	正月4日	四日堂 万福寺 面形10面等が伝存
16	東久留 女木	一部行事残存	浜松市北区	阿弥陀堂	異同無	万歳柴 (ヒヨドリ)	2月1日	正月17日	
17	川名	現行	浜松市北区	薬師堂	異同無	ヒヨンドリ	1月4日	正月8日	八日堂 福満寺
18	滝沢	現行	浜松市北区	四所神社 林慶寺	(大日堂)	瓶子・シイト ウ・モミメシ	1月1日 1月4日	正月6日・7日	七日堂 安楽寺
19	狩宿	廃絶	浜松市北区	——	阿弥陀堂	ヒヨンドリ	——	正月5日	
20	別所	廃絶	浜松市北区	——	阿弥陀堂	不明	——	不明	面形3面が伝存
21	神沢	現行	浜松市天竜区	阿弥陀堂	異同無	オコナイ	1月4日	正月5日	五日堂 万福寺 2009年復興
22	懐山	現行	浜松市天竜区	泰蔵院	(阿弥陀堂)	オコナイ	1月3日	正月5日	五日堂 新福寺
23	熊	廃絶	浜松市天竜区	——	不明	不明	——	不明	詳細不明
24	横山	廃絶	浜松市天竜区	——	観音堂?	ヒヨドリ等	——	正月2日～15日? 正月朔日～10日?	面形11面が伝存
25	西浦	現行	浜松市天竜区	観音堂	異同無	田柴	正月18日	正月18日	
26	小畑	廃絶	浜松市天竜区	観音堂	異同無	田遊び	1月24日	正月24日	御開帳のみ、面形17面が伝存
27	神原	廃絶	浜松市天竜区	——	観音堂	例祭	——	正月20日	
28	河内	廃絶	浜松市天竜区	——	観音堂	例祭	——	正月18日	
29	向市場	廃絶	浜松市天竜区	——	観音堂	田遊び	——	1月18日	田遊びは実施されない

D

E

旧祭場の欄の括弧書きは、廃絶したものの、仏堂が神社拝殿に転用されたものを示す。

旧富山村（現豊根村）の御神楽祭、長野県下伊那郡天龍村坂部の冬祭といった霜月神楽にも鬼が登場するが、これらは霜月の湯立神楽に修正会系行事の鬼が取り入れられたものである。花祭の鬼については「村人を祝福にやって来る鬼」「来訪神」といった奇妙な解釈が蔓延しているが、榊鬼とネギとの問答を見れば判るように、やはり修正会の鬼の性格を受け継ぐ追放される鬼である。

花祭の鬼を祝福のため来訪する神とするのは近代以降の「研究」によって創られたフィクションにすぎない。さらに言えば、秋田県の男鹿半島のナマハゲをはじめとして、東北地方や日本海沿岸地域に分布するナマハゲの類例も、その源流は修正会の追放される鬼であったと見るのが適切なものである。花祭の分布する地域に隣接する集落である東栄町西菌目の田楽、北設楽郡設楽町黒倉の田楽は、逆に花祭の鬼が修正会系行事に取り入れられたものである⁽³³⁾。

東海地方でも三河・信濃・遠江国境地域以外では、集落の仏堂・神社の修正会系行事に鬼が登場する事例は見られない。前述のように滝山寺の田遊びの付随する修正会には鬼が登場するが、滝山寺の行事が影響を与えたと考えられるものは周辺に存在しない。また、法多山尊永寺（静岡県袋井市、高野山真言宗）の修正会は田遊びが付随するが鬼は登場しない。周辺の静岡県中部地域には法多山の行事の影響を受けたと見られる事例（表11の15～20）が分布しているが、法多山と同様に鬼は見られない。東海地方では修正会の鬼はかならずしも田遊びとセットとして伝播され、受容されたものではなかった。

兵庫県の播磨地域には、多くの鬼の登場する修正会系行事が伝承されているが⁽³⁴⁾、その中で田遊びの付随するものとしては、現行の加西市の東光寺（天台宗）の例があり⁽³⁵⁾、廃絶したものとしては隣接する西脇市の莊嚴寺（高野山真言宗）と多可郡多可町の楊柳寺（天台宗）の2例が知られている⁽³⁶⁾。この地域でも、かならずしも鬼の登場する修正会と田遊びがセットで伝播・受容されたわけではなかったということになる。また、この地域の場合は鬼の登場する修正会の受容は、基本的に地方顕密寺社のレベルにとどまり、集落の仏堂・神社には受容されておらず、これは三河・信濃・遠江国境地域とは異なる点である。

高野山周辺地域の天野社の行事の影響下で成立した事例では、現行のものでは梁瀬の御田の最後の「鬼はしり」に鬼が登場したことが想定でき、廃絶した中南にも「をにをどり」があった。この2例は素面での次第であったが、ともに鬼面が伝来しているのは前稿で述べたとおりである。他の事例では、かつての鬼の登場を窺わせる次第は見られず、鬼面の伝来も知られていない。一方、御田の実施が確認できない現かつらぎ町志賀の大隆寺（廃絶）の近世の修正会には「鬼はしり」があった。また、奈良県吉野郡野迫川村弓手原のオコナイにも最後に素面での「鬼踊」があった。高野山周辺地域でも、東海地方や播磨地域と同様に、天野社で出合った修正会の鬼と田遊びが、かならずしも各集落へセットとして伝播され、受容されたわけではなかったのである。

本来的に法会の場合から追い払われる存在であった鬼も、花祭の鬼に見られるように、行事の中での見せ場のように扱われることが少なくなかったと思われる。梁瀬の御田では模擬耕作の終了後に祭場の大日堂の西北の隅に張られていた注連縄を白シラゲが刀で断ち切り、この後「鬼はしり」となる。滝山寺の鬼祭では模擬耕作終了後の後払いの「長刀振り」が終わって鬼の登場となる。ともに模擬耕作のための結界が破られた後に鬼が登場するというかたちなのであろう。

田遊びが付随する修正会に鬼が登場する事例は、上述のように東海地方、兵庫県播磨地域、そして高野山周辺地域に分布している。そして東海地方の三河・信濃・遠江国境地域と高野山周辺地域では集落レヴェルの宗教施設である仏堂にまで受容されていた。この組み合わせの分布のあり方は前節で設定した「近畿・東海型田遊び」の拡がりの中では、それぞれ東端、西端、南端に位置するということになる。このような位置に同様の構成をもつ事例が分布することに、何らかの歴史的な要因があるのか否かは、現在のところ不明とせざるを得ない。

14 子供の人形

田遊びに子供の人形が登場することは東海地方を中心に廃絶例を含めて20箇所ほどの事例が知られている。これらの子供の人形には少なからず男根が付されていたり、人形の登場する場面に木製の男根が持ち出されたりするものがある。田遊びに登場する子供の人形は、子供の成長する力だけでなく、性の力を稲の生成・成長・登熟のための呪術として利用するものなのである。東海地方とその延長線上の事例と位置づけることのできる現東京都内の3例（現行2例、廃絶1例）を除けば、現行の田遊びに子供の人形が登場するのは、管見では高知県室戸市の御田八幡宮、前述の奈良県宇陀市の水分神社、大阪市平野区の杭全神社の3例が知られるのみである。

田遊びに登場する子供の人形の一覧を、野本寛一氏作成の表を参考にして⁽³⁷⁾、廃絶例や史料に見えるものも含めて少し幅ひろく取って表10に掲げる。この表を見れば田遊びの人形は東海地方で成立して東西に伝播していったとの想定も可能なようにも思われる。しかし、以下に述べるような文字史料や関連する事例を含めて考えると、かならずしもそうとは言えない。

滋賀県甲賀市の油日神社に所蔵される「ずずい子」という巨大な男根が付された子供の木製の裸体の人形には背面に「出雲明秀(花押)作」という墨書銘がある⁽³⁸⁾。この銘は12節で取り上げた福太夫面の銘と同一人の筆跡と認められるものである。この「出雲明秀」と福太夫面の銘の「櫻宮聖出雲」は同一人物であり、「ずずい子」も福太夫面と同じく永正5(1508)年ごろの制作と判断できる。宝暦4(1754)年・安永8(1779)年の次第書には「すくいよふ」「福太夫よふ」などとあり⁽³⁹⁾、油日神社の「稲講会」では近世以前から「ずずい子」と福太

表10 田遊びに登場する子供の人形

	宗教施設	所在地	行事名	名称	形状・材質	登場場面
1	諏訪神社	東京都板橋区	田遊び	ヨナボ(米坊)	藁で身体を作り 2人を示す	昼飯持
2	北野神社	東京都板橋区	田遊び	ヨナボ(米坊)	藁で身体を造り 巨大な男根	昼飯持
3	水川神社	東京都練馬区	田遊び	ヨネボ(米坊)	男根がある	廃絶
4	八坂神社	静岡県藤枝市	田遊び	タロッコ	木の股に目鼻を 描く	孕五月女(出産)
5	蛭児神社	静岡県牧之原市	田遊び	ホダコゾウ	杉葉を束ね上の 紙を付ける	ほだ引き・田植
6	三熊野神社	静岡県掛川市	地固め舞・ 田遊び	ミコ(ネンネコサ マ)	日本人形	行列・神子抱き
7	小畑観音堂	浜松市天竜区	田遊び	ネンネンボウシ	藁人形の頭部に 目鼻を描く	廃絶
8	西浦観音堂	浜松市天竜区	田楽	ネンネンボウシ	藁人形の頭部に 目鼻を描く	山家五月女
9	泰蔵院	浜松市天竜区	オコナイ	ネンネ	布を丸めて人形 に見立てる	汁かけ飯(直会)
10	神沢阿弥陀堂	浜松市天竜区	オコナイ	あすての子?	不明	田植・田遊びの 部分は廃絶
11	川名薬師堂	浜松市北区	ヒヨンドリ	オブッコ	杓子を布でくる む	汁かけ飯
12	四所神社 林慶寺	浜松市北区	正月行事	ネンネコサマ	杓子を布でくる む	シイトウ祭
13	鳳来寺	愛知県新城市	田楽	ネンネサマ	杓子に・紙布を 被せ目鼻を描	ボゴアソビ
14	大林大日堂	愛知県新城市	田楽	不明	木製の男根	廃絶
15	田峯観音堂	愛知県設楽町	田楽	ネンネ	杓子・男根に服 を着せる	昼飯持(田植)
16	財賀寺	愛知県豊川市	お田植祭 (田祭)	オコゾウサマ	木彫の人形を布 でくるむ	昼飯持
17	猿投神社	愛知県豊田市	田遊び	不明	不明	廃絶
18	七所社	名古屋市中村区	きねこさ祭(田 祭)	ネンネン	壺に入った服を 着た人形	行列・田行事
19	手力雄神社	岐阜県各務原市	田遊び	ね、こほうし	不明	廃絶
20	油日神社	滋賀県甲賀市	稲講会	ずずい子	木彫、巨大な男 根を付す	廃絶
21	水分神社	奈良県宇陀市	御田	若宮サン	木の芯に綿を巻 き黒尉面	昼飯持
22	六県神社	奈良県川西町	御田	(名称無)	太鼓を子供に見 立てる	昼飯持(出産)
23	杭全神社	大阪市平野区	御田植祭	次郎坊	日本人形	田植
24	長田神社	岡山県真庭市	お田植祭	御子	御子と書いた奉 書包	模擬耕作終了後 (出産)
25	御田八幡宮	高知県室戸市	御田	(名称無)	木彫に着物を着 せる	酒絞り、若嫁が 人形を奪い合う

夫面を用いての田遊びが行われていたとすることができる。

前々稿・前稿で触れた延文6(1361)年5月の年紀をもつ『貞和五年年中祭礼記』には愛知県豊田市の猿投神社・神宮寺の修正会と同日に実施される田遊びについて「子守り」の記載があり⁽⁴⁰⁾、子供の人形の存在を窺わせるものとなっていた。こちらは東海地方の西三河地域の事例であり、南北朝期にさかのぼる年紀をもつ史料であるが、この猿投神社・神宮寺の例が田遊びの人形の初発というわけではなかろう。いずれにせよ油日神社の「すずい子」や猿投神社・神宮寺の史料から、近畿・東海地方の田遊びに中世以来、子供の人形の登場が見られることがあったとできる。

12節でも触れた岐阜県各務原市の手力雄神社の「於当社二月朔日ノ夜田遊の次第」には「一、子をおぶ」という次第があり、「一、ひるい、をくい、さけをのむ」の部分に「まづ、ね、こほうしにし、をやるしかたあり、しづへ」とある。「ね、こほうし」と呼ばれる子供の人形を背負った昼飯持ちが登場し、人形に小便をさせる所作があったということである。類似する人形の呼称は東海地方に多く見られる。後述するように現行の田遊びでも人形に小便をさせる所作の見られるものがある。

現行の田遊びに登場する子供の人形について概観しておこう。東京都板橋区内には2例の子供の人形が登場する田遊びが伝承されている。徳丸の北野神社と大門（下赤塚）の諏訪神社の事例である⁽⁴¹⁾。ともに人形は「ヨナボ」（米坊）と呼ばれており、稲藁で作られ、竹籠に入れられ登場する。北野神社の「ヨナボ」は表面が紙で覆われ、顔が描かれ、身体は5色の線で彩色され、巨大な男根が表現されている。諏訪神社の「ヨナボ」は頭が2つ、上半身も2つ、手が4本あり、2人を表現した人形となっている。前の人形には面部には白紙が張られ「壽」の文字とその年の干支が墨書されている。前の人形には乳房が表されており、母親が乳児を背負った姿を示すものであると理解されている。

ともに昼飯持ちの場面に登場するもので、北野神社では櫃を持った者が一緒に登場する。諏訪神社の場合は「ヨナボ」が入れられた竹籠に強飯入りの弁当箱が収められている。「ヨナボ」に続いて登場する土俗的な面を着けた「太郎次」と「安女^{やすめ}」は、「太郎次」は各地の事例の福太郎にあたる者であり、「安女」は妊婦の態を示しており、やはり各地の昼飯持ちの場面に登場する女装の人物に相当する。

前節で触れた奈良県宇陀市大宇陀平尾の水分神社の御田には「若宮サン」と呼ばれる人形が見られる。これは木の芯に綿を巻き五体を作り、頭部に黒尉面を着け後頭部にも木製の椀のようなものを着け頭部としたものである。この「若宮サン」は昼飯持ちの場面に女装の「オナリ」（ケンズイ持ち）と同時に出る「小頭^{しょうとう}」に抱きかかえられて登場する。他の地域の例から見て元来は「オナリ」が抱いたものなのであろう。この人形には頭部や腕・脚を含め全身に無数の紙縫りが結び付けられている。紙縫りは治病に効果があるとされ、登場の場面や行事終了後に行事参加者や地元の観覧者が自らの患部と同じ部位に結ばれた紙縫りをいただ

くことが見られる。

大阪市平野区の杭全神社の御田植祭では「次郎坊」という子供の人形が登場する。「次郎坊」は田植えの場面で白尉の面を着けた「穂長の尉」によって呼び出される作男の「太郎坊」に背負われて登場し、「穂長の尉」に抱かれて伏せた盥の上に置かれたモツウ飯を食べさせる所作、次に桶に小便をさせる所作が演じられる⁽⁴²⁾。人形に飯を食べさせる所作は鳳来寺(愛知県新城市)の田楽をはじめ東海地方の田遊びに多くの事例がある。

表10に示したように東海地方の田遊びに登場する子供の人形には「ネンネンボウシ」「ネンネ」などの類似する呼称が多い。当然ながら、これらの例は関連するものと見ることができる。三河・信濃・遠江国境地域の人形は杓子を布や紙でくるみ、場合によっては目鼻を描いたものも少なくないが、この杓子も男根を象徴している可能性があるだろう。

浜松市北区滝沢の四所神社(旧大日堂)・林慶寺(大日如来像を移座)の正月行事の田遊びの次第の一部が残存したものと見られるシイトウ祭では杓子を布で包んだ人形(ネンネコサマ)を両手に捧げ持って「やわらげやな、閏年の御子なれば、持ち物までも色白く、だいだいと、シイト、シイト、シイト」と唱えながら四方に小便をさせる場面がある⁽⁴³⁾。また、同市天竜区水窪町の西浦田楽では山家五月女^{やまがさおとめ}の場面で舞処の地面に撒かれる稗酒(実際には米で造られた濁酒)を子供の人形である「ネンネンボウシ」の小便と称している⁽⁴⁴⁾。これらは杭全神社の例も含めて、本来は肥料としての尿ではなく、精液を大地に撒くことによって豊穰を期待する呪術なのであろう。前述の手力雄神社の次第書にも「ね、こぼうし」に小便をさせる所作が記されていた。

名古屋市中村区岩塚町の七所社のきねこさ祭(田祭)では、バスケット状に縄で縛られた壺に下半身を入れた子供の人形(ネンネン)を2人(1人は女装)が棒で担い佐屋街道を巡る行列に加わる。この人形は七所社境内での田遊びの部分にも登場する⁽⁴⁵⁾。このような壺に納められた人形は他に知らないが、比較的近接する津島神社(愛知県津島市)の祈年祭に位置付けられている春県祭には田遊びが含まれ、同じように2人が棒で同様の壺を担う⁽⁴⁶⁾。この壺には人形が収められていないが、あるいは津島神社の春県祭にも子供の人形が見られた可能性もあろうか。

愛知県小牧市久保一色の田県神社で3月15日に実施されている豊年祭は巨大な男根形が登場する奇祭としてひろく知られている。この行事は近現代における変化が甚だしいものである⁽⁴⁷⁾。現在の田県神社の所在地は、近世には「縣の森」と呼ばれる小祠が所在する程度のものであったのが、神仏分離以降、『延喜式』神名上の尾張国丹羽郡の条に見える「田縣神社」とされていったようである⁽⁴⁸⁾。もちろん「縣の森」が古代の「田縣神社」の名残であった可能性は否定できないが、近世の地元の認識としては、あくまで「縣の森」であって、その祭祀は同所の久保寺(曹洞宗)が中心となって地元の久保一色村で執り行われていたようである。

津田正生（1776～1852年）の『尾張国地名考』（1816年成立）の春日井郡久保一色村の項に「春縣祭」として近世後期の状況が記されている⁽⁴⁹⁾。これによると正月15日の行事で久保寺の修正会に連動するものであったと見られ、地元では「閉乃固祭」と呼ばれていたという。午前中に実施された久保寺から「縣の森」への行列は「本地佛」と呼ばれる久保寺の將軍地藏立像と「藁人形の座像長二尺許なるに袴を著せ太刀を帶せてそれに一尺八寸ほどある木作り朱いろの大男根を附たる」ものの2つが中心であったという。近代以降、將軍地藏の渡御は無くなり⁽⁵⁰⁾、男根を付した藁人形は失われ、男根だけが残り次第に肥大化していった。このように田県神社の豊年祭は、東海地方に多く見られた修正会に付随する田遊びから模擬耕作の要素が欠落し、残った男根を付した人形も近代以降には失われ、男根型だけが巨大化していったものなのである。

子どもの人形は登場しないものの、関連すると考えられる事例にも触れておこう。奈良盆地中央部に位置する奈良県磯城郡川西町保田^{はた}の六県神社の御田（子出来御田）には子供の人形は見られないが、出産の場面が模擬的に演じられる⁽⁵¹⁾。六県神社と同一境内に南北朝期の建物とされる本堂が重要文化財に指定されている富貴寺（真言宗豊山派）が所在し、元來は富貴寺の鎮守社であった可能性がある。かつては正月14日を期日としていたこともあり、奈良県下では数少ない寺院修正会との関わりが想定できる御田の事例である。

現状では次第が混乱しているようで、田植えの後に「種蒔神事」が行われる。田植えの次に「螺拾い」があり、続いて女装の昼飯持ちが登場する。昼飯持ちは懷に小さな鉦打ち太鼓を入れており、夫との問答の後、子供に見立てた太鼓を産み落とす。出産の場面が演じられる田遊びとしては、他に表10の4の静岡県藤枝市滝沢の八坂神社の「孕五月女^{はらみさおとめ}」の場面で五月女が子供の人形（タロッコ）を産み落とす事例⁽⁵²⁾、25の高知県室戸市吉良川町の御田八幡宮の「酒絞り」の事例が知られている⁽⁵³⁾。

滋賀県甲賀市の佐土神社の御田祭には子供の人形は登場しないが、祭場となる拝殿には若嫁の紋付と丸帯を入れた盥が置かれ、模擬耕作の開始前に神職が産声を出すなど出産の場面が演じられる⁽⁵⁴⁾。前述の近接する油日神社の「ずずい子」が盥に収められていることと併せ考えると、あるいは佐土神社の場合も元來は子供の人形が見られたのかもしれない。各地の田遊びの昼飯持ちの場面に登場する女装の男性が妊婦の態の扮装をすることは数多く見られる。

岡山県真庭市蒜山下長田の長田神社のお田植祭では、拝殿での模擬耕作の終了後に「オサン」（於三）1名が本殿へ昇る階段の途中で懷中の「御子」と書かれた奉書包を落とす。この中には前日に神職によって用意された人形^{ひとかた}が入れているという⁽⁵⁵⁾。この奉書包に入れられた人形^{ひとかた}は、田遊びに登場する子供の人形の退化・形骸化した存在と見るべきものである。「御子」の落とされた位置の高低によってその年の村内の安産・難産を占うという。この次第は近年では実施されていない。地元では「オサン」をお産＝出産の意に解しているが、「オ

サン」は休憩・食事の場面である「はしま」の際に食物を持って登場する役でもあり、他の事例の^{ひるま}昼飯持ち・オナリ・ウナリと同様であり、「オサン」はオサンドン（飯炊き女の意）などのオサンと同様の意味とするのが適切である⁽⁵⁶⁾。

少し変わった例として、奈良県葛城市^{かもり}加守の^{しどり}倭文神社（葛木倭文坐天羽常命神社）の御田では、御田に登場する耕牛が仔牛を出産する場面が演じられる⁽⁵⁷⁾。倭文神社の御田は多くの奈良盆地の御田の事例と共通する内容をもつものであるが、このような牛の出産は他に見られない。

模倣的な出産が演じられる事例があるだけでなく、田遊びに登場する人形には子授けにまつわる呪術が見られる場合がある。表10の6の三熊野神社の例では、行列に登場する人形（「神子」あるいは「ネンネコサマ」）を御旅所や拝殿で抱きかかえる「神子抱き」が子授け祈願として実施されている⁽⁵⁸⁾。8の西浦観音堂では山家五月女の場面で「ネンネンボウシ」を背負った子守役が萱の箒で観衆の尻などを叩いて回るが、これにも子授けの呪力があるとされている。16の財賀寺の御田植祭では一連の次第の最後に人形（オコゾウサマ）が抱かれて登場し、飯を食べさせる所作があり、その後、子授けの希望者が「オコゾウサマ」を抱くことが見られる⁽⁵⁹⁾。前述の室戸市の御田八幡宮の例では子授けを願う若嫁が激しく人形を奪い合うという⁽⁶⁰⁾。

なお、他に東海地方の新春行事では、愛知県稲沢市の尾張大国霊神社（^{こうのみや}国府宮）の^{なおい}儺追神事（はだか祭）の翌日未明に実施される夜儺追神事で儺負人（神男）に背負わせる災厄が込められたものとされる黒い餅の上に子供の人形が付けられている⁽⁶¹⁾。餅と人形の頭には導火線のようなものが付けられ火が燈される。これは田遊びに登場する人形とは性格の異なる形代としての人形である。

さて、表8と表10を併せ見れば、重なる事例も少なくなく、どちらも概ね近畿・東海を中心として西は中国地方、東は南関東に及んでいる。前節で取り上げた「穂長の尉」と「福太郎」に類似する呼称、およびこの節で見てきた子供の人形の存在は「近畿・東海型田遊び」の指標となり得るものであろう。

しかしながら、高野山周辺地域の御田には子供の人形は痕跡を含めて全く見られない。これはこの地域の行事の発信地——田遊びと修正会が出会った場である天野社の御田に、もともと子供の人形の登場が見られなかったからであろう。このように高野山周辺地域の場合は人形の存在と「穂長の尉」と「福太郎」に類似する呼称の拡がりとは異なるあり方を示している。このことをどのように考えるか、が今後の大きな課題となる。

15 方固め

東海地方の田遊びには、田遊びの開始前に刀・長刀・棒・槍などの武器や堅杵を振り、祭

場を結界する方固めが実施されるものがある。事例によっては田遊びの終了後にも方固めが実施されるものもある。近畿地方をはじめとして他の地域の田遊び・御田には同様の結界儀礼はほとんど見られない。東海地方でも、すべての田遊びに方固めが付随しているわけではない。表11に東海地方の方固めの見られる田遊びの事例を示しておく。また、田遊びの前後に実施されることのある獅子舞も結界儀礼の性格をもつものと考えられるので表11に含めておいた。

表11を通覧すると、鳳来寺の行事の影響下に伝播・定着したと見られる三河・信濃・遠江国境地域の事例は、すべて集落の仏堂か、元来は仏堂であった施設で実施されてきたものであったことが窺える。これに対して静岡県西部の遠江・駿河地域の事例は、法多山尊永寺の影響下で伝播・定着したものと想定できるが、基本的には神社の行事として受容されているのが異なる。もちろん前近代にはどの施設も多かれ少なかれ神仏習合の状況であったであろうが⁽⁶²⁾、やはりこれは地域的な差異と見ることができよう。鳳来寺や尊永寺の行事と同様に修正会に田遊びが付随する事例である滝山寺の行事が周辺に影響を与えたと思われるものは見当たらない。

美濃地域の3例は現状ではいずれも神社での行事である。また、表11の1の明建神社（岐阜県郡上市）の七日祭は新春行事ではなく、近世以来7月7日（現在は月遅れの8月7日）に実施されてきたことが史料的に確認できる⁽⁶³⁾。2の春日神社（岐阜県関市）のどうじゃこう、3の伊和神社（岐阜県加茂郡富加町）の田の神祭は、ともに現在では4月に実施されているが、元来は正月の行事であった⁽⁶⁴⁾。表11に示した多くの事例で、刀・長刀などの採り物を振る前もしくは振る途中で、持って出た扇子を放り投げたり、後見に手渡したりする所作が見られる。美濃地域の事例も同様である。この所作自体に特別な意味があるとは思えないが、このような些細なことの一致からも東海地方各地の方固めが一連のものであることが窺える。

もう一点注目しておきたいのは、2のどうじゃこうに見られる立てた松明にロープでゴンドラを使って点火することである。同様の仕掛けは、13の西浦観音堂（浜松市天竜区）の田楽、14の伊豆神社（長野県下伊那郡阿南町）の雪祭にも見られる。西浦ではロープを引く際に「でたいどうじ」との声が掛けられるのに対して、どうじゃこうでは行事名の由来ともなっている「どうじゃこうなりけり」との掛け声がある⁽⁶⁵⁾。けっして無関係とは思えない共通点がある。西浦と伊豆神社の2例は三河・信濃・遠江国境地域に位置し、比較的近接するものであるが、2は東海地方でも遠く離れた美濃地域の事例であることが注目される。なお、これらの立てられた松明にかざらず、会場に設置される松明や篝火などを「仏の火」「神の火」とする宗教的な解釈が少なからず見られるが、第1義的には夜間の行事における照明装置であったとするのが適切である。

三河・信濃・遠江国境地域の場合、静岡県西部地域の場合は、それぞれ地方顕密寺院であ

表11 東海地方の修正会系田遊びの「方固め」

	施設名	所在地	鼻高	棒	刀	木刀	両刀	両木刀	長刀	木長刀	槍	杵	その他	獅子	備考
美濃	1 明建神社	岐阜県郡上市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	新春行事ではない
	2 春日神社	岐阜県関市	—	○	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○	獅子は宝獅子と箕獅子の2番
	3 伊和神社	岐阜県富加町	—	○	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○	現在は5年に1度実施
三河	4 滝山寺	愛知県岡崎市	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	長刀は東次郎と西次郎の2番
	5 安久美神戸神明社	愛知県豊橋市	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	鼻高の採りものは長刀
三信遠国境地域	6 鳳来寺	愛知県新城市	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	鼻高の採りものは棒
	7 田峯観音堂	愛知県設楽町	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	鼻高の採りものは棒
	8 黒沢阿弥陀堂	愛知県新城市	○	—	○	—	—	—	—	—	—	○	—	○	鼻高の採りものは棒
	9 寺野観音堂	浜松市北区	○	—	○	○	○	○	—	—	—	○	*	○	鼻高の採りものは棒 *棒
	10 川名薬師堂	浜松市北区	—	—	○	○	○	○	—	—	—	—	—	○	* いなぶら2番
	11 泰蔵院	浜松市天竜区	—	—	○	○	○	○	—	—	—	○	—	○	元来は懷山観音堂で実施
	12 神沢阿弥陀堂	浜松市天竜区	○	—	○	○	○	○	—	—	—	○	—	○	一部次第復興
	13 西浦観音堂	浜松市天竜区	○	—	○	○	○	○	—	—	—	○	—	○	槍は大小2番 *高足と高足もどき
	14 伊豆神社	長野県阿南町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	*サイホウとどき 明治以前は仁壽寺藏音堂
	15 法多山尊永寺	静岡県袋井市	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
豊江・駿河	16 三熊野神社	静岡県掛川市	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—
	17 蛭見神社	静岡県牧之原市	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	△	獅子は廃絶
	18 大井八幡宮	静岡県焼津市	△	○	—	—	—	—	○	—	—	—	*	○	* 箒（神子舞）
	19 八坂神社	静岡県藤枝市	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○	大井川・安倍川系の神楽と混線
	20 大井神社	静岡県川根本町	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	大井川・安倍川系の神楽と混線

る鳳来寺と尊永寺が行事の発信地と想定できるが、美濃地域の場合は、現状では発信地を特定することはできない。2の春日神社、3の伊和神社とも、前近代には神仏習合状況にあった施設で、行事に際しても寺院・僧侶の関与したことが想定されている⁽⁶⁶⁾。1の明建神社は、元来は妙見菩薩を祀る施設で、前近代までは同一境内に別当寺の尊星王院が所在した。このような星を祀る神仏習合状況の施設で、修正会系行事の要素を取り入れた儀礼が七夕に実施されるようになったものが明建神社の七日祭ではなかろうか。

東海地方の事例の延長線上に位置すると考えられる「福太郎」の類例や子供の人形が見られた12節・14節でも取り上げた東京都内の事例についても触れておこう。現行の2例の田遊びには「呼び込み」という次第がある。板橋区徳丸の北野神社では田遊びの「田植え」の後に「昼飯持ち（「ヨナボ」を抱く）」「太郎次・安女」「獅子」「馬」「矢」が次々と仮設舞台上の「大稲本」に呼び出されて登場する。これに対して同区下赤塚の諏訪神社では田遊びの開始前に「御矛の舞」の天狗、「破魔矢（弓と矢）」「馬」「獅子」が呼び込まれる。そして「昼飯持ち」と「太郎次・安女」は一連の田遊びの「田植え」の前に呼び込まれる。諏訪神社のあり方が元来のかたちを伝えていると見られる。

他の地域の事例から見て「昼飯持ち」と「太郎次・安女」は一連の田遊びのなかの演目であり、これに対して「御矛の舞」の天狗や「獅子」「馬」「矢」は性格の異なるものと判断できる。おそらく破魔矢と馬は一体のもので元来は流鏑馬を模した弓射儀礼が実施されたのであろう⁽⁶⁷⁾。獅子舞と鼻高面を着けた御矛の舞を含めて、これらは田遊び開始前の結界儀礼に相当するものと見ることができる。東海地方の方固めと同様の意味をもつものである。

東海地方以外の地域の田遊びには方固めに類する内容はほとんど見られない。管見に触れた他の地域の類似する例を見ておこう。遠く四国の高知県室戸市吉良川町の御田八幡宮の御田祭の例がある。この事例では一連の田遊びの「田刈」の後に長刀を採り物とする「小林」と刀を採り物とする「地堅^{ちがため}」が登場する⁽⁶⁸⁾。これは後払いの方固めと見てよい。この事例は他にも前節で触れた子供の人形の存在、猿楽面の使用や漁業の予祝儀礼が含まれるなど東海地方の田遊びとの共通点が多く見られる。何らかの歴史的な事由があるのであろうか。

12節でも触れた岡山県苫田郡鏡野町の布施神社のお田植祭では、拝殿前庭での田遊び開始前に「獅子練り」が実施される。これは2頭の3人立ちの獅子舞で、それぞれの獅子に「太刀使い」という長刀を持った少年1人が付く⁽⁶⁹⁾。やはり田遊び開始前の結界儀礼の意味をもつものであろう。これが東海地方の方固めと関連するものであるか否かの判断は保留しておきたい。

さて、このような東海地方を中心に見られる田遊びに付随する方固めは如何なる由来をもつものと考えられるであろうか。神社の社殿を造営するに際して「宝堅」「法堅」の儀礼が実施されたことが、はやく京都府綴喜郡井手町の高神社の文永8（1271）年の年紀をもつ「高神社造営流記」、大永3（1523）年の「山城国綴喜郡多賀郷惣社大梵天王法堅目録」に見える⁽⁷⁰⁾。

これは社殿造営に際しての一種の地鎮の作法ということであろうから、ここで取り上げている方固めとは、やや性質が異なるものであるが、結界儀礼として「宝堅」「法堅」の語が見えることに注目しておきたい。

ここでは鳳来寺および三河・信濃・遠江国境地域の仏堂での修正会系行事に登場する鼻高面を着けた者の存在に着目したい。6の鳳来寺では演目に鼻高面を着けた者が棒を振る「棒のらんじ」などが見られる。鳳来寺の行事の影響下で伝播・定着したと考えられる三河・信濃・遠江国境地域の現行の事例では表11の7田峯観音堂、8黒沢阿弥陀堂、9寺野観音堂に鼻高面を着けた者が鉾を採り物とする演目が見られる⁽⁷¹⁾。寺野では他にも素面の者が鉾を採り物とする演目もある。寺野の本郷である渋川の薬師堂（後に観音堂）のはやくに廃絶した行事でも、寺野とほぼ同じ演目があり、やはり鼻高面を着けた者が鉾を採り物とする次第が見られ、やはり隣接する12神沢でも鼻高面を着けた者が鉾を採り物とする次第が見られたようである⁽⁷²⁾。鳳来寺の例の採り物が周辺とは異なり矛ではなく棒となっているのは後の変化であろう。

13の西浦観音堂では、「地能」（方固めと田遊びなど）、余興の「はね能」（猿楽）が終了した後、「薬師」と呼ばれる烏天狗のような面形を着けた者に先導されて獅子が登場する。続いて13節で触れた誤って「しずめ」と呼ばれている鬼が登場し、咎め役に叱責され後ろ手にされて引張られ後退して退場する。次に「火の王」「水の王」の次第となる。「火の王」は鼻高面で「水の王」とセットになるものである。これは別当が「火の王」「水の王」の面形と模造の矛を持って鎮める次第である⁽⁷³⁾。この「火の王」と「水の王」が本来の「しずめ」であり、やはり鼻高面と矛を用いての後払いの儀礼である。

花祭に登場する「しずめ」もやはり鼻高面を着け、1人で演じるものと「火の王」「水の王」の2人で実施されるものがある。これは霜月の湯立神楽の中に新春行事の要素——具体的には鳳来寺の修正会の「棒のらんじ」に見られる鼻高面を着けた者による結界儀礼——が取り入れられたものである。長野県の遠山谷（現飯田市）の霜月の湯立神楽に登場する「火の王」「水の王」も同様の由来をもつものであろう。鬼に象徴されるような行事の場にふさわしくないもの、招かれざるもの、行事の場から追い払われるべきものを鼻高面が追い払うというのが「しずめ」の本来の意味なのである。

ここで想起されるのが福井県の若狭地域、京都府の丹後地域、兵庫県の但馬地域など日本海側中心に多くの事例が伝承されている「王の舞い」の存在である⁽⁷⁴⁾。「王の舞い」はやはり鼻高面を着けた者が矛を振って行事の場を結界する儀礼である。中世後期には近江などの近畿地方にも「王の舞い」の分布が見られたことが現存する面形や史料から確認できるが⁽⁷⁵⁾、現状では近畿地方中央部には見られず、日本海側を中心とする分布となっている。

滋賀県甲賀市の檜尾神社のお田植え祭りでは、鳥兜を被り、鼻高面を着けて矛を持った「天狗」が神職以下の関係者の祓場から拝殿への先導役を務める。神道祭式終了後、模擬耕作と

なり「場所取り」では鋏、「田すき」では唐犁、「代かき」では馬鋏の木造のきわめて簡略化された模造品を用いて「天狗」1名が演じる。次の「苗取り・田植え」では早乙女役の少年3名を「天狗」が指図して苗取りと田植えを演じる。休憩である「こびる」を挟んで再度「苗取り・田植え」があり、模擬耕作は終了する。この後「天狗」が矛を振っての「払い」があり、続いて「天狗」が鼓を打ち、翁面を着けた者が扇子で自らの肩を打つ「田植え祝い」で行事が終了する⁽⁷⁶⁾。

この檜尾神社の「天狗」は近江地域における「王の舞い」の残存したものであり、「天狗」が矛を振る「払い」は模擬耕作終了後の後払いで、東海地方の方固めに相当するものである。近江地域でも田遊びと鼻高面と矛の結界儀礼が結び付いた事例が見られるのである。なお、檜尾神社は前近代には隣り合う檜尾寺（文殊院、天台宗）と一体のものであり、お田植え祭に際しても住職が神事に列席して読経したり、鐘樓の梵鐘が撞かれたりする。

東海地方では、この「王の舞い」が修正会系行事に取り入れられ、さらに刀や長刀、棒などさまざまなものを振っての結界儀礼が成立し、これが多くの行事に伝播していったことが想定されるのではないか。田遊びと修正会が出会った地方顕密寺院での出来事であったのであろう。これは東海地方の田遊びに付随する方固めが、地方顕密寺院の行事とその影響を受けた宗教施設の行事だけに見られることの原因でもあろう。

16 他の近畿地方と東海地方の差異—牛耕と馬耕、餅の模造鋏など—

近畿地方と東海地方の田遊びには少なからず異なる点が見られる。前稿の高野山周辺地域の修正会に付随する田遊びを取り上げた中で触れた鏡餅を吊り下げて供える「掛け餅」は、近畿地方以西の修正会の荘厳には一般的に見られるが、東海地方ではほとんど見られない。

また、東海地方の田遊びの実施される行事では、特に集落の宗教施設の場合には、修正会系行事に田遊びだけでなく、前節で取り上げ方固め以外にも、獅子舞、弓射儀礼などのさまざまな要素が付随している事例が見られる。奈良盆地の多くの定型的な御田に代表されるように、近畿地方では模擬耕作以外の要素が付随していることは少ない。さらに、この節で取り上げるように、代掻きの場面での牛耕と馬耕、鋏などの田遊びの用具に餅で造られたものを用いるか否か、といった差異も見られる。

近畿地方の田遊び（御田）では牛耕の場面が演じられることが多く、馬耕は見られない。これに対して、東海地方では牛耕と馬耕の双方の事例が見られる。実際の水田稲作における西日本の牛耕、東日本の馬耕という差異が影響を与えているのであろうが、かならずしも、その地域のかつての実際の稲作の状況とは合致していないようである。

近畿地方でも東海地方でも、牛は人間が獅子舞の獅子頭のような牛頭や牛面を付けて牛に扮するものが多い。東海地方の事例の延長線上のものである東京都板橋区内の2例でも木製

の牛面が用いられている。牛は1人立ちのものと2人立ちのものがある。東海地方では牛耕・馬耕の双方とも模造の唐犁や馬鋤を用いる例はほとんど見られない⁽⁷⁷⁾。京都府の丹波地域や中国地方では、牛頭などを用いずに注連縄・菖蒲などを頭に巻き牛の角を表す場合も見られる⁽⁷⁸⁾。岡山県苫田郡鏡野町の布施神社のお田植祭では、少年が2人一組になって横に並んで牛役を務め、模造の唐犁・馬鋤を引く。この事例では角を付けるなどの扮装は見られない⁽⁷⁹⁾。

前稿で示したように高野山周辺地域の御田では、牛頭を被った牛役が牛耕の場面に登場する。天野社では2人立ち、他の真国宮・梁瀬・杉野原・久野原では1人立ちの牛となっていた。いずれの事例でも、模造の馬鋤や唐犁は用いられていない。これに対して、比較的近接する奈良盆地の御田では、同様に牛頭を被った2人立ち、もしくは1人立ちの牛が登場するが、模造の馬鋤と唐犁を用いる次第が別々に2度にわたって実施されるのが一般的である。奈良盆地以外にも南山城地域などの近畿地方では模造の馬鋤・唐犁が用いられる例が多く見られる。そのなかで高野山周辺地域の御田のあり方は特異な状況といえる。

三河・信濃・遠江地域の田遊びに代掻きの場面に登場する馬は、短く切った竹の棒の両端に丸餅を付けたものを馬の轡に見立てることが多い。これに対して、三重県鈴鹿市の夜夫多神社の御鋤祭（馬の砂かけ）では張り子の馬頭を着けた2人立ちの馬が登場する⁽⁸⁰⁾。岐阜県可児市の白鬚神社の御鋤祭では現状では馬頭を被った1名の馬役が田掻きの次第に登場するが、これは近年における変容と見られる⁽⁸¹⁾。なかには静岡県掛川市の三熊野神社の田遊びのように生きた実物の馬が登場する例もある⁽⁸²⁾。また、三河・信濃・遠江国境地域では田遊びに馬頭を用いた次第が見られるものがあるが、これは代掻きの馬ではなく、馬の飼養を模倣的に演じる場面に登場するものである。

全国的に見れば、人が扮するのではなく、ツクリモノの牛が登場する例もある。管見では張り子の牛が登場するものが長野県に2例見られる。大町市の仁科神明宮の「古式作始めの神事」、東筑摩郡筑北村の刈谷沢神明宮の「お田植祭」では代掻きの場面で張り子の牛が用いられている⁽⁸³⁾。どちらの事例でも、2名が、それぞれ牛の口取り、馬鋤を使う役で、張り子の牛を使って牛耕を演じる。刈谷沢神明宮では牛耕を演じる2名を「太郎」と「次郎」と称しており、これは12節で述べた福太郎とその分身の1例とすべきものかもしれない。

また、近畿地方の事例である京都府亀岡市の松尾神社の御田祭では、麦藁で作られほうの葉を巻き、木製の角と男根を付けた全長50センチメートルほどのツクリモノの牛に模造の唐犁を連結したものを使って代掻きを演じる。唐犁に車輪が付されているのは珍しい⁽⁸⁴⁾。

これらは牛の姿を具象的に表したものであるが、1本の木で牛を抽象的に表現したものが用いられる事例が各地に見られる。奈良県桜井市の大神神社の御田祭では、根本が三ツ股になった長さ150センチメートルほどの木を牛に見立て、作男がこれに操って牛耕のさまを演じる⁽⁸⁵⁾。近接する同じく桜井市の穴師坐兵主神社の廃絶した御田でも同様の牛に見立てる木が見られたようである⁽⁸⁶⁾。

滋賀県甲賀市の佐土神社の御田では1メートル弱ほどの松の木を脚となる4本の枝を残して、角に見立てる短い枝を取り付けたものを牛として神職が牛耕を演じる⁽⁸⁷⁾。同じく甲賀市の油日神社の『川枯神社 油日大明神初祭御神事記』に「稲講会之事、正月初申ノ夜、於舞殿兩社家神主等之、爲牛木檜一本切之」と檜で作られた「牛木」の名称が見える⁽⁸⁸⁾。これは具体的な形態や、田遊びの中でどのように用いられたのかは判然としないが、やはり、耕牛として用いられるツクリモノの牛に見立てるものであったのであろう。

愛知県岡崎市の滝山寺の鬼祭りの「牛木」についても触れておこう。これは長さ約130センチメートル、周りの大きさ約15センチメートルの黒松と赤松を、それぞれ一本伐り出し、かたちを整えて、顔の部分に穴をあけ、約10センチメートルの横木（鼻環）を通し、胴体部分に御幣を結びつけたものである。本堂下の石段の登り口に置かれた「牛木」が修正会開始前に引き上げられる。ところが「牛木」は田遊びの中では用いられず、奇妙な存在となっている。

角や脚にあたる部分があり、鼻環も付けられるので、牛を象ったツクリモノであることはまちがいない。やはり、上述の他の事例から見ても、滝山寺の「牛木」も、田遊びの中で用いられるものであったと考えられる。しかし、この「牛木」が東西一対の2体である点は説明つかない。田遊びの中で用いられなくなった「牛木」が、本堂前庭に設置される大御幣や大松明の影響を受けて、同じように1対用意されるものとなったのであろうか⁽⁸⁹⁾。

ここで取り上げた「牛木」やそれに類する4例は、奈良盆地、滋賀県、愛知県三河地域と近畿・東海地方に跨って地理的にはかなり離れた地域に伝承されている。しかしながら、「牛木」の呼称は共通し、無関係なものとは思われない。少数ながらも広域に伝承されていることから見て、かなり古い由来をもつものである可能性があるのではなからうか。かつて近畿・東海地方にある程度広がっていた田遊びのあり方の名残とも見ることのできる事例ではあるまいか。

新春行事の場に供物などとして餅が見られることは多い。近畿地方以西の修正会系行事では仏前や神前に「掛け餅」と呼ばれる餅が吊り下げられることが多い。高野山周辺地域でも梁瀬と杉野原の御田には「掛け餅」が見られ、野迫川村の北今西と弓手原のオコナイでも「掛け餅」が見られたことは前稿で述べた。これに対して東海地方では寺院・仏堂で実施される修正会に付随する田遊びでも「掛け餅」はほとんど見られない。餅は普通の鏡餅のように仏前・神前に供えられているのが一般的である⁽⁹⁰⁾。

全国的に見れば、模擬耕作に用いられる用具は木製の模造品であることが一般的で、鋏も鉄の刃を付けず、刃の部分に黒く塗った木製の模造品が多く用いられている⁽⁹¹⁾。実物よりも比較的小型のものが多いが、中には極端に小さなミニチュアのもの、柄の部分が実物より長い大型のものなど変化に富んでいる。前稿で述べたように高野山周辺地域の御田では木または竹の柄を付けた木製の模造鋏が用いられていた。これに対して、東海地方では木製の模造

鋏を用いる例も見られるが、この地域に特徴的なこととして餅を鋏や他の用具の模造品とすることが三河・信濃・遠江国境地域をはじめとして少なからず見られる。これは東京都内の2例にも共通する。

延文6(1361)年5月の年紀をもつ猿投神社・猿投神宮寺の貞和5(1349)年における年中行事の書き上げである『貞和五年年中祭祀記』には正月5日からの5日間の修正会の結願の後に田遊びが実施されたことが見える⁽⁹²⁾。この史料には「笠ノ餅」「鞍餅」「種米^{クネシネ}」「田打餅」「牛ノ轡」「子守り」「鋏持」「女假裝鏡」などの田遊びで実施された模擬耕作のあり方の窺える文言が記されている。「笠ノ餅」「鞍餅」「田打餅」「牛ノ轡」は餅を利用した牛の鞍や轡、鋏などの用具と見て問題は無い。東海地方では中世以来、田遊びの用具として餅を利用した事例が見られたということである。

このような田遊びの用具としての餅の利用は、管見では近畿地方以西には見られないし、また関東地方以北にも見られないようである。これはおそらく東海地方で成立した田遊びのかたちなのであろう。

むすび—近畿・東海型の田遊びの展開の中での高野山周辺地域—

以上、前々稿・前稿を含めて16節にわたって高野山周辺地域の修正会に付随する御田(田遊び)について考察してきた。多岐にわたった内容を整理しておこう。

高野山周辺地域の御田は、神仏分離以前の丹生都比売神社(天野社)で修正会と同日に実施されていた行事が各集落へ伝播し、定着したものであった。前稿で示したように、高野山周辺地域には仏堂が稠密に分布する。天野社で出合った田遊びと修正会は、各集落の宗教的な中心である仏堂を受け皿として受容されたものであった。高野山周辺地域は、本稿でも度々触れてきた三河・信濃・遠江国境地域や滋賀県の湖北地域とともに、集落の仏堂を会場とする修正会系行事が多数伝承されてきた地域なのである。

湖北地域には、ほぼ近世村ごとに北部と南部に2種類の特徴的な仏堂が所在し⁽⁹³⁾、比較的古い仏像が祀られ、集落の中心的な宗教施設として修正会の流れを汲むオコナイをはじめとする民俗宗教の行事が実施されてきている⁽⁹⁴⁾。現状では神社境内に所在する仏堂というかたちが多いが、前近代には仏堂が主体で、その鎮守社であったものが村社とされていったものが少なくない。近江国伊香郡には『延喜式』神名に登載された官社が46社もあり、俗に言う「式内社」を多数創設しなければならなかったという事情があった。また、この地域が戦国期以降、ほぼ一面の葬祭仏教として浄土真宗が卓越する地域となっていたこともあって⁽⁹⁵⁾、仏堂に安置される真宗以前のさまざまな仏像を仏堂を廃して真宗寺院へは移座できなかったということもあった。

このような歴史的・宗教的な経緯により、湖北地域では他の地域には見られない、集落ご

とに仏堂が伝存し、そこで修正会系行事であるオコナイが実施されるという特徴的なあり方が伝承されてきた。しかし、高野山周辺地域や三河・信濃・遠江国境地域とは異なり、湖北地域のオコナイには田遊びが付随するものはまったく見られない。これはこの地域のオコナイをはじめとする集落の宗教に影響を与えた地方顕密寺院である己高山（長浜市、廃絶）、菅山寺（長浜市、真言宗豊山派）、大吉寺（長浜市、天台宗）、伊吹山（米原市、天台宗、山上部分は廃絶）では修正会と田遊びが出会うことがなかったからなのである。

これに対して三河・信濃・遠江国境地域では、鳳来寺で出合った田遊びと修正会が周辺の集落の仏堂の行事として伝播・定着していった。この地域では密度・絶対数とも湖北地域ほど多くの仏堂が所在しているわけではない。この地域は、本願寺教団以前の初期真宗門流の活動の痕跡も見られるが⁽⁹⁶⁾、近世以降の葬祭仏教としては臨済宗・曹洞宗の禅宗が卓越する地域である。仏堂は集落の住民によって管理され、ネギと呼ばれる非専門の宗教者（世襲の者もそうでない者もある）を中心に行事が営まれている。禅宗寺院と集落の行事とは結びつく場合もあり、仏堂の廃絶後に行事が葬祭寺院で実施されるようになった例も見られ、仏堂での行事でも葬祭寺院の住職が参加する場合もある。また、この地域の南に隣接する愛知県の旧新城市では、本堂とは別に境内仏堂が所在し、仏堂が葬祭寺院化していったと想定できる事例も見られる。

高野山周辺地域では、前稿で述べたように、近世村よりも小さな単位にも仏堂が見られた。建物は3間×3間もしくは5間×5間の宝形造のものが一般的である。近年の文化財としての修復が実施されたものでは短い棟をもつ寄棟造に復元されているものもある。仏堂の敷地が近代になって学校などの公共用地に転用されることが少なからず見られ、仏堂の建物が失われた集落も少なくない。葬祭寺院は高野山真言宗をはじめとする真言宗系の寺院がほとんどである。また、仏堂の敷地に葬祭寺院が移転したり、近代以降、敷地内に墓地が設けられたりしている例もある。真宗地域である湖北地域とは異なり、高野山周辺地域でも、三河・信濃・遠江国境地域でも仏堂と葬祭寺院の連続性が見られる。

このような集落の中心的な宗教施設としての仏堂は、明治初年の神仏分離・廃仏毀釈、明治末年の神社・仏堂の合祀により、姿を消してしまった地域も少なくないが、仏教の面的な受容・浸透、前近代の日本の宗教を考察するため、また、行事や儀礼の受容の場として大きな意味をもっている。高野山周辺地域では、各集落の仏堂を受け皿として神仏習合の場であった天野社で出合った田遊びと修正会が受容されたのである。

仏堂は前近代の日本各地に広範に分布していた。岡山県の美作地域には、現状では数例にすぎないが、かつてはかなり稠密に「お田植祭」の呼称で田遊びが伝承されていたようである⁽⁹⁷⁾。また、この地域にも近世村やそれよりも小さな単位に多くの仏堂が伝存している⁽⁹⁸⁾。ところがこの地域の「お田植祭」は近世以来、中山神社（美作国一宮）、高野神社（同二宮）、美作総社（いずれも津山市）をはじめとする神社の行事であった⁽⁹⁹⁾。仏堂で実施されたとい

う例はない。美作地域でも、湖北地域と同様田遊びと修正会が出合うことはなかったのである。

12節・14節で「穂長の尉」と「福太郎」の類例、子供の人形の登場を指標として東は南関東から西は中国地方東部にいたる範囲で「近畿・東海型田遊び」という類型を想定した。高野山周辺地域の御田では「穂長の尉」と「福太郎」の類例は濃密に伝承されているが、子供の人形の登場は見られなかった。14節で述べたように子供の人形の源流は中世に遡るものであるが、天野社で修正会と出合った田遊びには元来子供の人形は見られなかったのであろう。

しかし、この2つの指標は、有力神社をはじめとする神社での田遊び、寺院・仏堂での田遊びという枠組みを超えて見られる。天野社のような神社を主体とする神仏習合状況の施設で、田遊びと修正会が出合う以前から存在した要素と見るのが適切である。

南関東から中国地方東部にいたる範囲のなかでは近畿地方中心部、特に奈良盆地の事例が希薄となっている。奈良県下（大和国）にはきわめて多くの御田が伝承されているが⁽¹⁰⁰⁾、大半の例が神社を会場とするものであり、ほぼ同じ内容のものとなっている。修正会との結び付きを窺わせる事例はきわめて少ない。これに対して大神神社などの比較的大規模な神社や、水分神社・白山神社（ともに宇陀市）の事例のように奈良盆地から離れた地域、および隣接する京都府の南山城地域には独自の内容の御田が伝承されていることがある⁽¹⁰¹⁾。現行の多くの同内容の事例は比較的新しい時期に拡がっていったものであろう。奈良盆地の定型的な御田の伝播・定着には、修正会に付随するものではなかった春日大社の御田の影響が大きかったものと考えている⁽¹⁰²⁾。

奈良盆地の定型的な御田では、「穂長の尉」と「福太郎」の類例、子供の人形の登場は見られない。修正会と結び付いたものではないので、当然のことながら鬼の登場も見られない。奈良盆地は「近畿・東海型田遊び」の想定域の中に位置するが、このような状況をどのように考えるべきであろうか。これは修正会と出合う以前に源流のある2つの指標の見られる田遊びが近畿地方・東海地方に伝播した後に、春日大社を発信地とするあらたなスタイルの御田が奈良盆地に拡がり、従前の多くの事例を更新してしまった結果なのであろう。今日、われわれが目にするのできる行事の内容、分布域は、このような複数の発信地をもつ行事の相互干渉によるものと見るのが妥当である。

高野山周辺地域の御田は、天野社で修正会と出合った「近畿・東海型田遊び」に含まれる田遊びが仏堂を受け皿として受容されたもので、子供の人形の登場は見られないが、「穂長の尉」と「福太郎」の類例は濃密に伝承され、修正会と出合ったものであったので鬼の登場が見られる場合もあった。

【註】

- (1) 美山村史編さん委員会編『美山村史』史料編（美山村 1991年）312～317頁に御田の次第書である明治16(1883)年の『御祭礼御田精録』の翻刻が掲載されている。「大茂之亟」の「亟」は丞の誤記・誤写でおものじょうの意であろう。
- (2) 2019年3月21日調査。
- (3) 別々の木札に／ごとに「初申稲講会次第／第一福德吉方／二三社大明神初祭／三麦津く／四ひよせ／五させ／六あせヲぬる／七廻り戸打／八とひくりけ／九こゑヲ持さかす／十すゝいのよふ／十一日ヲみる／十二水戸祭」以上表面、「十三ヤキ米力む／十四種ヲ持／十五種ヲ打す／十六たねヲまく／十七鳥ヲおう／十八福太夫よふ／十九間んの津かさ／二十福太夫なゑヲ打／二十一惣氏子へなへまく／宝暦四^甲戌正月／瀬古式部太夫」以上裏面（2枚は裏は空白）となっている。2019年3月21日調査。
- (4) 『川枯神社 油日大明神初祭御神事記』に稲講会の次第・詞章が記されている。縣社油日神社社務所編『縣社油日神社誌』（縣社油日神社社務所 1913年）95～100頁に史料の全文が掲載されている。
- (5) 2020年6月21日調査。各務原市教育委員会編『各務原市史』通史編自然・原始・古代・中世（各務原市 1986年）773頁などに史料の写真が掲載されており、各務原市教育委員会編『各務原市史』史料編古代・中世（各務原市 1984年）356～358頁に史料の翻刻が掲載されている。
- (6) 揖斐川町編『揖斐川町史』史料編（揖斐川町 1970年）537～546頁などに史料の翻刻が掲載されている。
- (7) 2019年4月13日調査。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター編『杭全神社宝物撰』（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2010年）、公益財団法人八尾市文化財調査研究会編『豊作への祈り—大阪府内の農耕儀礼—』（公益財団法人八尾市文化財調査研究会 2018年）23～27頁などに関係史料の写真・釈文などが掲載されている。
- (8) 註(7)前掲、公益財団法人八尾市文化財調査研究会編『豊作への祈り』25頁など。
- (9) 近年では2015年1月7日に調査を実施した。
- (10) 『図録三嶋大社宝物館』（三嶋大社 1998年）106頁に白尉面の写真が、124頁に解説が掲載されている。解説によると銘は「江州北坂田郡井関文右衛門尉 八十五歳にて 是作 寛永永かうし年喜斎(花押)」となっているという。
- (11) 京都府教育委員会編『京都の田遊び調査報告書』（京都府教育委員会 1979年）11～30頁、新井恒易『農と田遊びの研究』下（明治書院 1981年）99～110頁。
- (12) 2012年1月8日調査。
- (13) 近年では2012年2月11日に調査を実施した。脊古真哉「滝山寺の鬼祭—修正の田遊びと鬼会—」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』32 2013年）参照。
- (14) 名古屋市蓬左文庫蔵。「こつぼめ」と「福太郎」について「初め出たる名ハこつぼめと云へ後に出たるハ福太郎なり、伝説にこつぼめハ親也□也、福太郎ハ子也弟也と両説あり、いつれか是なるを不知」とある。新編岡崎市史編集委員会編『新編岡崎市史』12民俗（新編岡崎市史編さん委員会 1988年）742～751頁に史料の全文が翻刻されている。
- (15) 富村史編纂委員会編『富村史』（岡山県苫田郡富村 1989年）924～928頁、富村教育委員会・富村文化財保護委員会編『布施神社のお田植祭』（富村教育委員会・富村文化財保護委員会 2000年）。
- (16) 2014年1月18日調査。土井実・池田源太・池田末則編『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会 1959年）228～233頁に弘化2(1845)年の詞章の全文が翻刻されている。上野誠「平尾水分神社のオンダ」（桜井満・瀬尾満編『宇陀の祭りと伝承』おうふう 1995年）参照。
- (17) 近年では2013年2月16日に調査を実施した。静岡市市民局文化スポーツ局文化財課編『日向の七草祭—静岡県指定無形民俗文化財調査報告書—』（静岡市教育委員会 2006年）口絵に

寛永21(1644)年の年紀のある詞章本全文の写真が掲載され、69～78頁に同書と万延2(1861)年の年紀のある詞章本の釈文が掲載されている。万延本では「トクタロ」「フクタロ」は「徳太郎」「福太郎」となっている。

- (18) 2020年7月4日に南丹市日吉郷土資料館に寄託されている多治神社の棟札・宮座関係文書およびかつての御田の用具などの関係史料を調査し、多治神社で神社総代6名からの聞き取りを実施した。註(11)前掲、京都府教育委員会編『京都の田遊び調査報告書』69～96頁参照。
- (19) 近年では2014年2月15日に調査を実施した。
- (20) 近年では2015年1月6日に調査を実施した。脊古真哉「長滝白山神社の六日祭—修正延年に含まれる田遊び—」(静岡県民俗学会編『日本民俗論』岩田書院 2006年)参照。
- (21) 辻本好孝『和州祭禮記』(天理時報社 1944年 1979年名著出版復刻)138～150頁に史料の全文が翻刻されている。
- (22) 註(11)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下94～98頁。
- (23) 『新編武蔵国風土記稿』巻之66の橘樹郡鶴見村の条の杉山明神・牛頭天王(相殿)の項に「海道五十間程引いりて右の方にあり、この村の鎮守なり、此杉山神社は勸請の年曆も傳へざれど、昔より此社にて毎年正月十六日の夕方、百姓等がうたひをどる明神の田祭うたと云ものあり、殊に古風なるものにて關東の守護三島大明神といへることあり、是らにても北條の頃の物たることしるべし、その餘には證とすべきこともなし、例祭年毎に杉山の明神は正月十六日、天王は六月七日より十四日迄なり、石鳥居を前に立又本の鳥居もたてり」とある。廬田伊人編集校訂『新編武蔵風土記稿』第3巻(大日本地誌大系9 雄山閣 1970年)。永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌』上(錦正社 1968年)123～135頁参照。
- (24) 『杉山神寿歌考註』。竹内秀雄校注『神道大系』神社編17武蔵国(財団法人神道大系編纂会 1978年)494～503頁に詞章の部分が翻刻されている。
- (25) 近年では2013年2月10日に調査を実施した。
- (26) 新井恒易『中世芸能の研究』(読書新社 1970年)665～667頁参照。
- (27) 近年では2012年2月11日に調査を実施した。脊古真哉「滝山寺の鬼祭—修正の田遊びと鬼会—」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』32 2013年)参照。
- (28) 近年では2017年1月7日に調査を実施した。『静岡県民俗学会誌』17特集千葉の民俗(静岡県民俗学会 1997年)参照。
- (29) 註(20)前掲。
- (30) 個人蔵。末尾に近く「昔此山有赤青黒三鬼、仙人随従給仕。及仙人入定時刻、三鬼命曰。吾入定後、汝等住此山、可難有道俗參詣。不可叶僧徒住侶。所詮為吾投身命、期仏果菩提、還守護此山。三鬼全仙言応。即三鬼刎首、本堂柱下符納。非無証拋。鬼骨于今有之。因茲每年正月三日・十四日夜、於本堂・鎮守・常行堂、五人大烏帽子謡万歳楽、獅子舞・田楽舞等有之。件役者百日精進寒氷垢離丁重勤之、昔山家三方被勤之由伝承、今長篠・黒瀬參勤事其謂歎。殊十四日夜鎮守・常行堂祭礼過、於本堂流鏑馬弓納等慇懃勤之。内陣修正結願已、三人僧赤青黒鬼形變、手天安囉々持斧鎚、足地平哩々踏拍子、七難一天外打払、七福四海内打納。其後近里人民手々明松、面々提棒堂内堂外踊躍歡喜及暁天。是鬼踊云。宵暁祭礼則天下安全御祈禱、又為三鬼孝養申伝也」とある。川合重雄他編『三州鳳来寺山文献集成』(愛知県郷土資料刊行会 1978年)3～7頁に史料の翻刻が掲載されている。
- (31) 1992年1月14・15・16日調査。
- (32) 近年では2013年2月27日に調査を実施した。
- (33) 現在休止中の西園目は1992年4月12日に、黒倉は近年では2017年2月19日に調査を実施した。
- (34) 喜多慶治『兵庫県民俗芸能誌』(錦正社 1977年)には廃絶倒も含めて兵庫県下の計34箇所の鬼の登場する修正会系行事が紹介されている。

- (35) 2012年1月8日調査。
- (36) 西脇市教育委員会・多可町教育委員会編『西脇・多可の鬼と天狗』（西脇市教育委員会・多可町教育委員会 2013年）25～31頁に莊嚴寺の、44～45頁に楊柳寺の関係史料が掲載されている。
- (37) 野本寛一「田遊びと人形」（同氏『稲作民俗文化論』雄山閣出版 1993年 初出は1985年）では、やや性質の異なるかと思われるものも含めて、ひろく田遊びに登場する人形および関連する事例を蒐集している。
- (38) 盤の中に座して両腕・両脚および男根が可動するようになっており、かつては衣装を着せられていたという。2019年3月21日調査。
- (39) 註(3)(4)前掲。
- (40) 猿投神社蔵。豊田史料叢書編集会編『豊田史料叢書』猿投神社中世史料（豊田市教育委員会 1991年）201～233頁に史料の写真と訳文が掲載されている。
- (41) 東京都板橋区の徳丸の北野神社は2020年2月11日、同区の赤塚の諏訪神社は同年2月13日に調査を実施した。本田安次「下赤塚・徳丸・練馬の田遊—東京都板橋区・練馬区—」（『本田安次著作集日本の傳統藝能』第8巻田樂I 錦正社 1995年）には板橋区の諏訪神社・北野神社および廃絶した練馬区の氷川神社の子供の人形の写真が掲載されている。なお、板橋区の赤塚氷川神社でも「田遊び」との名称の行事が毎年2月10日に実施されているが、現状ではドンド焼きを行うのみとなっている。
- (42) 註(7)前掲。
- (43) 近年では2013年1月3日に調査を実施した。
- (44) 註(32)前掲。
- (45) 近年では2019年2月21日に調査を実施した。
- (46) 2017年3月17日調査。
- (47) 沼沢喜市「田県神社の豊年祭」（『民族学研究』21-1・2 1957年）、津田豊彦「尾張」（谷川健一編『日本の神々—神社と聖地』第10巻東海 白水社 1987年）、田縣神社10年基本計画策定委員会編『田縣神社10年総合基本計画』（田縣神社 2019年）など。
- (48) 式内社研究会編『式内社調査報告』第8巻東海道3（皇學館大學出版部 1989年）257～262頁など。
- (49) 『尾張國地名考』に「^{あがた}春縣祭／正月十五日也、祭の前日久保寺にて祈年穀の札を制りて村中へ配て田毎に^{みなくち}水口を祭らしむ、^{をほじかた}男莖形を造りて祭日の料とす、十五日の朝、久保寺にて福富をつく、其景物は御田扇・^{あたまみき}白米・^{うちまき}樹の三種をもて只三番のみ突なり、丁りたる人々は其年幸ひありとて遠近の人々元日より仰ぎて此を需むといふ、斯て富突すみて後、巳の刻ばかりに窪寺より田方の森まで三町半の道すがらを練物あり、まづ始に櫛を持出、次に神酒・神供を^{しらへぎ}白櫃に盛て持出、次に本地佛を持出〈世俗これを神躰といふは聊誤也〉、次に藁人形の座像長二尺許なるに袴を着せ太刀を帶せてそれに一尺八寸ほどある木作り朱いろの大男根を附たるを若者共二三人してかつぎ揚て、さも大音に「於保瓣能固—縣の森の於保瓣能固」と喚叫ながら路地をおかしく練て神慮を和め奉る事也、誠に本國の珍祭奇翫といふべし、斯て神社に至若ば本地佛の將軍地藏を社内に入れて其前に男莖形の藁人形も押居て神酒・神供をも供え、各手を拍て神拜し、暫時ありて其後神酒・赤飯等を衆人に配與へて歸る、是を土民は久保一色の閉乃固祭といふなり」とある。『尾張國地名考』（愛知縣海部郡教育會 1916年）200頁。なお、天保15(1844)年の成立と見られる『尾陽歳事記』（谷川健一編集委員代表『日本庶民生活史料集成』第23巻年中行事 三一書房 1981年所収）にもほぼ同様の内容が記されているが、これは『尾張國地名考』からの引用であろう。
- (50) 久保寺の本堂脇壇には將軍地藏立像が安置されており、傍らに木製の陰囊を付した朱色の男根型1本と小型の男根型2本が置かれ、壇の前の天井からは10数張りの「奉納將軍地藏尊」

と墨書され男根型が描かれた提灯が吊り下げられている。2020年8月9日調査。なお、前近代に渡御に出ていた将軍地蔵は「御前立」であるとか、焼失した、あるいは盗難に遭ったなどと伝承が錯綜している。

- (51) 2018年2月11日調査。
- (52) 近年では2014年2月15日に調査を実施した。
- (53) この場面では後述するように子授けを願う若嫁による人形の奪い合いが行われるが、女面を着けた「酒絞」と「取揚婆」が登場し、やはり出産を模擬的に演じるものである。本田安次「吉良川御田八幡の御田祭」(『本田安次著作集日本の傳統藝能』第8巻田樂I 錦正社 1995年) 参照。
- (54) 2014年2月25日調査。
- (55) 八束村史編纂委員会編『八束村史』(八束村 1982年) 812~819頁、行事当日の配布資料(前原茂雄氏提供)。
- (56) 註(11)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下366~368頁。
- (57) 2014年4月13日調査。
- (58) 近年では2010年4月4日に調査を実施した。
- (59) 近年では2010年1月3日に調査を実施した。
- (60) 註(11)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下423~434頁、註(53)前掲、本田氏「吉良川御田八幡の御田祭」参照。
- (61) 近年では2015年3月4日に調査を実施した。
- (62) 表11の19の八坂神社は、前近代には同一境内に薬師堂が所在したという。
- (63) 近年では2010年8月7日に調査を実施した。明建神社蔵の元禄6(1693)年の年紀をもつ「毎年七月七日國家安全祭礼執行之儀式」。2020年10月18日調査。大和町教育委員会編『大和町の文化財』(大和町 1995年) 92頁に史料の写真が掲載されている。同史料には渡御の次第に「六番 獅子頭〈ふつとり〉」とあり、獅子舞の獅子招きである鼻高面を着けた者が「ふつとり」と記されている。静岡県焼津市の大井八幡宮の田遊びでは獅子招きが「振取り」と呼ばれており、他にも静岡県には同様の事例がある。この獅子招きの呼称が共通することは無関係ではなからう。
- (64) 春日神社のどうじゃこうは近年では2010年4月18日に調査を実施した。伊和神社の田の神祭は近年では5年に1度実施されているが、2020年4月12日に予定されていた行事が中止となった。今後の実見調査を期している。
- (65) 「でたいどうじ」には「出体童子」、「どうじゃこうなりけり」には「童子夜行なりけり」の文字が当てられているが、ともに当て字であって、元来の意味は不明である。
- (66) それぞれの全体の論旨には賛同できないが、清水昭男「富加町加治田の田の神祭り―田樂に陰陽道の思念を見る―」(同氏『岐阜県の祭りから』Ⅶ 岐阜文芸社 2013年)、西岡陽子「美濃における三信遠系の田遊び―「どうじゃこう」を中心に―」(『民俗芸能研究』53 2012年) など。
- (67) 三河・信濃・遠江国境地域の事例では、13の新野では北野神社・諏訪神社の事例と相通じる作りものの馬を用いた流鏑馬が演じられ、1の鳳来寺では騎馬戦のように数人の人が馬となつての流鏑馬が演じられる。
- (68) 註(53)前掲、本田氏「吉良川御田八幡の御田祭」など。
- (69) 註(15)前掲、富村史編纂委員会編『富村史』924~928頁、富村教育委員会・富村文化財保護委員会編『布施神社のお田植祭』。
- (70) 高神社文書。京都府立山城郷土資料館編『南山城の神社と祈り』(京都府立山城郷土資料館 2015年) 25頁などに「高神社造営流記」の当該部分の写真が掲載されている。他にも同書29頁には京都府城陽市の水渡神社の天正9(1581)年の「寺田庄法堅法度書」の写真が掲載され

ている。

- (71) 近年では田峯は2013年2月11日、黒沢は2011年2月6日、寺野は2019年1月3日に調査を実施した。
- (72) 註(26)前掲、新井氏『中世芸能の研究』635・636頁、529～532頁
- (73) 近年では2013年2月27日に調査を実施した。西浦田楽については多くの紹介・研究があるが、近年のものとして、吉川祐子『西浦田楽の民俗文化論』（岩田書院 2012年）がある。
- (74) 橋本裕之『王の舞の民俗学的研究』（ひつじ書房 1997年）。
- (75) 滋賀県彦根市の久留美神社には応永15(1408)年の銘のある王鼻面2面が所蔵されている。彦根城博物館編『祈りの造形—近江・彦根の仏教美術』（彦根市教育委員会 1991年）86・87頁に写真が掲載され、110・111頁に解説がある。また、甲賀市の油日神社にも鼻高面2面が伝えられている。2019年2月21日調査。
- (76) 2019年3月21日調査。表紙に「お田植え祭／檜尾神社／H11.3.21」とある現行の次第書を参照した。
- (77) 静岡県掛川市の三熊野神社の事例では生きた馬が登場するが、この馬に模造の馬鍬を引かせている。後述する岐阜県可児市の白鬚神社の御鍬祭にも模造の馬鍬が見られる。
- (78) 註(11)前掲、京都府教育委員会編『京都の田遊び調査報告書』、註(55)前掲、八束村史編纂委員会編『八束村史』など。
- (79) 註(15)前掲、富村史編纂委員会編『富村史』924～928頁、富村教育委員会・富村文化財保護委員会編『布施神社のお田植祭』。
- (80) 2020年2月9日調査。東海地方各地には近世の伊勢信仰に由来する御鍬（みくわ・おくわ）祭が数多く伝承されている。脊古真哉「しかうちと御鍬—習合化論の試み—」（『愛知学院大学大学院文研会紀要』3 1993年）参照。三重県北勢地域ではさまざまな行事・儀礼と結び付くことがあり、この夜夫多神社の事例のように田遊びと結び付くことも見られたようである。
- (81) 2020年3月11日調査。以前実見した際には馬頭は見られなかったし、註(9)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』上638～640頁、可児町編『可児町史』通史編（可児町 1980年）1297～1300頁、可児市編『可児市史』第4巻民俗編（可児市 2007年）371～371頁などでも馬頭については触れられていないし、田搔きの場面の写真には馬頭は見えない。
- (82) 近年では2010年4月4日に調査を実施した。
- (83) 近年では、仁科神明宮は2014年3月15日、刈谷沢神明宮は2020年3月1日に調査を実施した。大北神社誌編纂委員会編『大北地方の神社と文化』（長野県神社庁大北支部・長野県神社総代会大北支部1991年）257～262頁、坂北村誌編纂会編『村誌さかきた』上自然編・民俗編（坂北村誌編纂会 1990年）447・448頁など参照。
- (84) 2020年7月5日調査。なお、京都府綾部市の綾部八幡宮の御田でも同様の牛と唐犁の連結されたものが用いられる。この事例は第2次世界大戦中に廃絶し、1997年に「再興」されたもので、この際に亀岡市の八坂神社および南丹市の多治神社の行事が参考にされたという。この牛と唐犁も八坂神社の牛と唐犁の影響であろう。
- (85) 2013年2月6日調査。
- (86) 註(19)前掲、辻本氏『和州祭禮記』134～150・206～211頁、註(9)前掲、新井氏『農と田遊びの研究』下148～168頁。
- (87) 註(54)前掲。
- (88) 註(4)前掲、縣社油日神社社務所編『縣社油日神社誌』95～100頁。
- (89) 註(27)前掲、脊古「滝山寺の鬼祭」参照。『三州瀧山寺人日法会記』では、登山行列の後、学頭青龍院が堂前（本堂外陣を言うか）に着座すると「本坂の上なる柵門の内のかた東西、太サ五寸廻りばかりに、長サ五六尺斗もあらむ女男の松を枝葉共に損せぬように伐取たる、その松の末の端に穴を明け、藤かつらを通して六七斗の横木を詰付、是を牛木と号て東西に一本宛

- 双置く（是ハ正月六日に松迎とて山にて伐出し、期のこくとく拵て本坂五十五段の下なる東西に建置、今日此ところへ上る也）」とある。名古屋市蓬左文庫蔵。註(14)前掲、新編岡崎市史編集委員会編『新編岡崎市史』12民俗742～751頁。
- (90) 静岡県藤枝市滝沢の八坂神社の事例では水口祭である「農業礼書」の場面で神体のように扱われている板で挟まれた「力餅」^{りきひょう}を捧げ持つことが見られる。
- (91) 註(80)前掲の夜夫多神社の御鋏祭では実物の平鋏が用いられている。
- (92) 猿投神社蔵。註(40)前掲、豊田史料叢書編纂会編『豊田史料叢書』猿投神社中世史料201～233頁。
- (93) 黒田龍二「滋賀県湖北地方のオコナイとその建築—祭礼建築論の試み—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』98 2003年）。
- (94) 和田光男「湖北オコナイの成立について—地方霊場寺院と村落寺院の影響—」（『京都民俗』6 1988年）、中澤成晃「湖北における修正会とオコナイの源流」（同氏『近江の宮座とオコナイ』岩田書院 1995年 初出は1992年）。脊古真哉「己高山をめぐる宗教文化—滋賀県伊香郡木之本町・高月町—」（櫻井徳太郎監修・木曜会編『民俗宗教』4 東京堂出版 1993年）。
- (95) 脊古真哉「湖北の真宗道場—方便法身尊像の機能を手がかりに—」（『宗教民俗研究』6 1996年）、脊古真哉「湖北地域における実如期本願寺教団の展開—称名寺とその門末を中心に—」（同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究』研究篇下 法蔵館 2000年）。
- (96) 脊古真哉「絵画史料から見た初期真宗門流の痕跡—もう一つの三河・信濃・遠江国境地域の姿—」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』27 2008年）。
- (97) 和歌森太郎編『美作の民俗』（吉川弘文館 1963年）361～370頁など。美作地域の田遊び（お田植祭）については、いずれ見解をまとめる予定である。
- (98) 2020年8月24日・25日・26日に岡山県津山市、真庭市、苫田郡鏡野町の多くの集落を踏査した。
- (99) 近世の美作国西部の地誌である『作陽誌』（『西作誌』元禄4（1691）年成立）。
- (100) 奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能1—奈良県民俗芸能緊急調査報告書—』（奈良県教育委員会 2014年）11～16頁。14頁の「奈良県内オンダ行事一覧表」には不適切なものも含まれているが、計56例の御田の事例が挙げられている。
- (101) これまで奈良県下では15例の御田の調査を実施している。また、南山城地域では2016年2月21日に木津川市の湧出宮の御田を調査した。
- (102) 2013年3月15日調査。前々稿「田遊びと修正会が会合う場（上）—高野山周辺地域の修正会系行事の成立と分布についての予備的考察—」参照。

【付記】

本稿は「寺院・仏堂を守護する神の展開・変容についての総合的研究—アジア仏教史の視座から—」（日本学術振興会科学研究費 基盤研究（C）2019～2021年度 課題番号19K00124 研究代表者脊古真哉、研究分担者黒田龍二・曾根原理・上島享・藤井由紀子）による共同研究の成果の一部である。

前々稿・前稿・本稿は2013年以来実施している高野山周辺地域の修正会と御田についての調査を契機として、長年の東海・近畿地方、その他の地域での調査の知見を踏まえての考察である。各地の新春行事および東海地方の民俗宗教の事例の調査は1986年以来30年以上にわたって続けてきている。

この間に数えきれないほど多くの地元の方々、寺社等の関係者の方々にお世話になった。また、調査に同行して下さった先学・友人・知己も少なくない。20代のころには、今では故人となられた村山修一先生、皆川完一先生にご同行いただいたこともあった。近年では上記の科学研究費

の研究分担者の諸兄姉にひとかたならぬご協力をいただいている。長年にわたる多くの方々のご協力に心から感謝いたします。

30年以上の間にはいろいろなことがあった。過疎化・少子化の影響でかつて調査した行事が廃絶したものも少なくない。前稿で述べたように高野山周辺地域でも2018年・2019年を最後に2例の御田が中止となった。今後10年・20年の間には、これまでに調査してきた事例のかかなりの部分が廃絶するものと思われる。また、過疎化以外の社会的要因による行事の中断もあった。1988・89年の当時の天皇の死去前後、2011年の東日本大震災の直後の行事の「自粛」、そして2020年の新型コロナウイルス感染症の流行による「緊急事態」である。

本稿で取り上げた行事でも、2020年度の調査・再調査を予定していたところ中止となったものも少なくない。前2回の行事の中止と比べて今回はさらに大規模・長期的なものとなり、本稿の執筆にも少なからぬ影響があった。また、筆者も還暦をむかえ、体力・気力とも往年ほどのものは無くなっている。このような中での行事の中止は、今後の研究活動への影響は大きなものとなりそうである。

現在の事態がさらに長期化すれば、過疎化・少子化で断絶していつている行事の廃絶に拍車がかかることも予想される。筆者はこれまで、行事の存続や中止については担い手である地元住民の判断によるべきことであって、外部の調査者や研究者が口を挟む問題ではないと考えてきている。この立場は今後も変わらないが、これまで多くの事例の調査を実施してきた者の責任として、調査事例の原稿化、公開については、これまで以上に取り組まなければならないと考えている。また、地元の伝承者等からの要請があれば、調査データや知見の提供にも積極的に応じてゆく必要があると思っている。残された時間は多くは無いが、今後とも新春行事をはじめとする民俗宗教の行事の事例に取り組んでゆきたい。

